

41613

教科書文庫

4
810
41-1938
2000301580

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

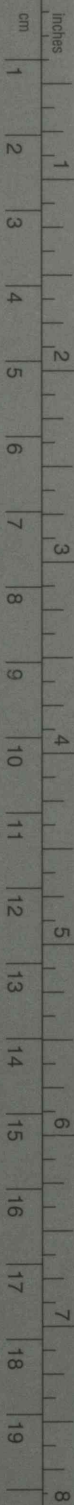


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Iq1
資料室

紙工圖法讀本

改訂版

卷一







下 陛 上 皇 の 上 馬 御

資 料 室

3759
194

濟 定 檢 省 部 文

附科文漢語國校學中 日五月二年三十和昭
用科語國校學業實 日五月二年三十和昭

廣島大學
圖書印

廣島大學
圖書印

西國語讀本

早稲田書局出版

廣島大學
教 39761

廣島縣立世羅中學校
第一學年第九學級二番
買 添 意

文學博士 五月廿九日 力編

卷一 目次

- 一 御修學時代の聖上陛下……………石井國次……………一
- 二 御帽子に御手が…………………………二
- 三 昭和の日本…………………………北原白秋……………六
- 四 伊勢の神宮を拜みて…………………………元
- 五 小野の道風…………………………坪内逍遙……………二六
- 六 良寛さま…………………………相馬御風……………四二
- 七 菖蒲の節供…………………………島崎藤村……………五五

八 苺……………五

九 此の一戦……………水野廣徳…三

一〇 遅かりし一時間……………七

一一 大海原の歌……………坪内逍遙…九

一二 時の歴史……………竹内時男…一〇

一三 蜘蛛の絲……………芥川龍之介…一〇

一四 愛犬ポチ……………長谷川二葉亭…一〇

一五 猫……………夏目漱石…一〇

一六 子供……………小林一茶…一四

一七 郷里なる愛兒に……………三

一八 狭霧の穂高……………一五

一九 乃木大將の幼時……………横山健堂…一四

二〇 美しき球……………矢島鐘二…一四

二一 形見の萬年筆……………池田宣政…一五

二二 自然の推移……………相馬御風…一六

二三 ふるさと……………石川啄木…一七

二四 秋の嫩草山……………島村抱月…一七



純正國語讀本 卷一

一 御修學時代の聖上陛下

石井國次

石井國次
元學習院教授
今上陛下御在學
當時、初等科主
事として親しく
御輔導申し上げ
た
茨城縣の人
明治七年(三五四)
生
允文允武
いらせられ
斑一

今上天皇陛下には允文允武におはしまして、萬民の上に君臨せさせ給ふべき聖徳を生れながらにおそなへ遊ばしていらせられます。私は恐れながら、今こゝに陛下が御幼少のみぎり、學習院御在學中の御事どもを申し上げまして、聖徳の一斑を仰ぎ奉りたいと存じます。

まづ第一に驚嘆し奉るは、御記憶の拔群にあらせられる

やうに
蟲(一虫)
お覚え
決(決)

聖德太子
第三十一代用明
天皇の第一皇
子。推古天皇二
十九年(三八)
薨。御年四十九

三寶
佛法僧
聖德太子の憲法
の第二條に「篤
ク三寶ヲ敬ヘシ
トある。

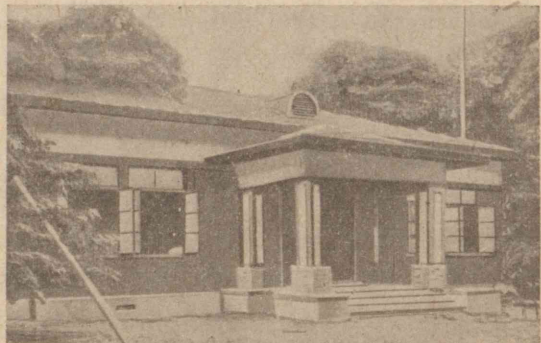
ことでありませぬ。私は今まで多くの學生に接して参りま
したが、陛下のやうに御記憶の強いお方は見受けたことが
ありません。蟲の名でも、貝の名でも、聯絡も系統も無いこ
とまで、一度お覚えになつた以上は、決してお忘れになると
いふことはあらせられませぬ。

かく御記憶の拔群な上に、御研究心が非常にお強く、何で
もいゝ加減にして置かれることがお嫌ひで、詳細に御質問
になり、又御自身徹底的に御研究になるのであります。例
へば歴史で聖德太子の御事蹟を申し上げますと、お歸りにな
つて参考書をお調べになり、聖德太子の憲法とはどんなも
のか、三寶とはどういふ事かと御研究になる。理科で蝶の

蝶類圖説
岡崎常太郎著

豊(豊)

かういふ



生 物 學 御 研 究 所

お話を申し上げますと、「蝶類圖説」をお調べになつたり、盛に御
採集になつたりして、日本産の蝶は勿
論、外國産のものまでも御觀察になる。
電氣のお話を申し上げますれば、種々の器
械をお取寄せになつて御實驗遊ばさ
れ、無線電信、電話の事まですつかり御
理解になるといふ風であります。旅
行、登山の御趣味も御豊富にあらせら
れ、單なる御運動としての外に、地圖や
案内記をよくお調べになり、その産物や、動物、鑛物から氣
象の事まで熱心に御研究になる。萬事がかういふ風であ

明治神宮

官幣大社
東京市澁谷區代
代木に鎮座
祭神は明治天皇
並に昭憲皇太后
明治天皇
御名陸仁明治四
十五年(至)七
月三十日崩御
御年六十一。第
百二十二代

らせられるから、御知識の確實で且深みのあらせられるこ
とは、實に驚嘆し奉る外はありません。

明治神宮に参拜して、明治天皇の日常御使用になつた御
調度品を拜觀した者は、誰でもその御質素なのに感泣しな
いでは居られないと思ひますが、陛下もまた明治天皇と御
同様に、すべて華美なことがお嫌ひであらせられます。例
へば御學用品なども、全く一般學生と同様な品を御使用に
なり、鉛筆などは、當時一錢五厘の鶯印のを好んで御使用に
なりました。しかもそれがごく短くなるまで決してお棄
てになりません。消ゴムも當時四五錢ほどのものを、豆粒
位になるまで御使用になり、雜記帳でも、半紙や畫用紙でも

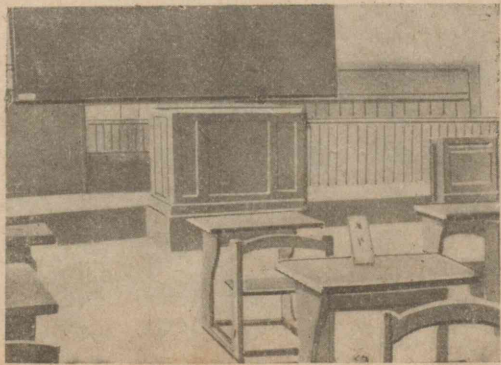
だらう。

少しもむだには遊ばしませんでした。それで、大正三年三
月初等科を御卒業あらせられました時、御高德を一般兒童
に拜せしめたならば、國民教育に裨益する所があるだらう
と考へて、陛下の御使用になつた背囊、教科書、雜誌、筆入から、
帳面、鉛筆、消ゴム、並に御製作になつた手工品、圖畫、標本等を
拜借して一室に陳列し、御教室、御控室等すべてを公開して、
一週間に亘り、市内及び近縣の小學兒童に拜觀させたこと
があります。その時、毎日何千といふ兒童が校長、教員につ
れられて参り、私どもは手分をして種々説明を致したので
あります。たしか京橋か日本橋あたりの學校と思ひます
が、女の子でかなり綺麗な服裝をして幅の廣いリボンなど

でせう。

をつけて来た一組がありました。私とその女生徒たちに説明をしてから、皆さんは、殿下でさへかやうに御質素であらせられることを拜見したら、もう立派な著物だの、幅の廣いリボンだのを家庭でおねだりが出来ないでせうね。と申したら、たいそう感動して泣いた生徒がありました。

陛下は又非常に規則正しいことがおすきであらせられます。朝の



室教御るけ於に院習學

御起床から御拜、御食事、御通學、御復習、御運動、御入浴、御寢まで、實に規則正しい一日の御日課をお守りになつて御變更

になることは容易にありませんでした。随つて何事を遊ばすにも、すべて規則正しい御計畫をお立てになつて、組織的に遊ばすといふ風であらせられます。

陛下は又實に公平無私であらせられます。例へば、戦争ごつこをなされた後で、私とその審判や講評などを致します時、御自分の方に不利なことが御有りになつても、少しもお包みなくお申出になる。角力で、陛下が相手をお投げ遊ばされて、軍配が御自分に揚つても、行司の氣づかなかつた少しの踏切などが御自分にお有りになると、私に踏切があつたから負です。と御主張になる。審判者や行司が少しでも不公平な判定をすると、非常にお嫌ひになる。仲間の者

ございませぬ

理路井然
公明正大

實に陛下の御心
は少しの曇もな
い明鏡であらせ
られます。

が「それで、お宜しいではございませぬか。」などと申し上げると、「そんな不正直なことはいけない。」と仰せられる。随つて歴史上の事柄を御批判遊ばされる時など、實に理路井然、公明正大で、よく大局から斷案をお下しになる。實に陛下の御心は少しの曇もない明鏡であらせられます。それゆゑ陛下の御心鏡の前に立つては、正邪善惡の姿がはつきりと顯れて、隠れるところはないのであります。

陛下は非常に御仁心が深い。どちらかと申せば、御口數の少い方で、餘分のこととは仰せられないが、誠に思ひやり深くあらせられます。随つて御幼少の時分から、普通の子供に有りがちな、友達にからかふとか、意地悪いことをすると

一視同仁

御外遊
大正十年三月よ
り九月まで六箇
月餘に亘つて歐
洲各國を御歴訪
あそばされた。

かいふやうなことは決してお有りになりませんでした。そして御學友に對しても、お側の者に對しても、全く好き嫌ひといふことがなく、一視同仁で、公平にお愛しになります。侍従や侍従武官などにも、少しも新舊の差別なしにお接しになると承ります。しかも舊い人をいつまでもお忘れにならずに、元の侍女や御學友などがお伺ひ申しますと、大層お喜びになりますし、時々のお召もあります。私どもにもやはりその通りで、御誕辰その他のお祝のをりにはお召があり、御機嫌伺に出ますれば、特別に拜謁を許され、御都合のお宜しい時は、お引止めになつてお言葉を賜ふのであります。先年御外遊の御時には、私はロンドンやパリでお迎へ

陪一倍

かやう

申し上げましたが、屢、お召を蒙つて御陪食を賜はり内外諸名士の前でも、先生、先生と仰せられますので、覺えず無上の光榮に感泣した次第であります。人心がだん／＼荒んで、師恩を忘れるどころか、全くこれを念頭におかないやうな青年學生の多い今日、陛下のかやうな御態度は實に貴い御模範ではありますまいか。

間然する所のない。現つ神 先天的—後天的

陛下の御盛徳を讃へ奉ることは、到底私どもの能くするところではありませんが、要するに陛下は御天性實に間然する所の無いお方で、現つ神としての神々しい御性格を先天的にお具へあそばしていらせられると申し奉るほかはありません。

〔教育研究〕

二 御帽子に御手が

拜啓。御機嫌よくお過しですか。私は相變らず無事に入浴勉強をつゞけて居りますから、御安神下さい。

今日早朝、當温泉の御用邸に御滞在中の聖上陛下が、御乗馬で那須嶽に登らせられました。左はその輝くお姿を拜み、御會釋を賜はつたのに感激して、歸る匆々に試みたものであります。

今日行宮に御いでましの聖上が、

今日 昭和三年八月十五日。

那須嶽 栃木縣那須の原野の北なる活火山、二、三米。

御壇山
新那須の後方の
小山。

鹵簿

靈山那須の大嶽おほだけに登らせらるゝ、
午前七時の御出門、
御乗馬で御壇山おんだんやまの新しい
山道にかゝらせらるゝといふ。

幸の折ではある。

私はこの登山の御鹵簿を拜すべく、
口をすゝぎ身を清めて出かけた。
そして東公園あづまの東の山道ぞひに、
黒服の警部とカアキイの兵士と、
幾人かの私服との注意のもとに、
老幼男女ぶちまんだらの

朝日と共に高光
るお姿の、木の
間に現れさせら
れる。

白服の御露拂

湯治客の拜觀者の間にまじつて、
静かに、しづかに、
朝日と共に高光るお姿の、
木の間に現れさせられるのを待ち受けた。

七時を過ぐる三十分、

白服の御露拂が、

馬を躍らして行き過ぎた。

それから二三分たつと、

栗毛の一騎を御先驅として、

悠揚あらはれさせられた、

白馬の上のヘルメットの御雄姿。

大御寶の群集に
御懇ろな御會釋
を賜はつた。

やがて、御帽子に御手がかゝると、
静かに振り向かせられて、
大御姿を仰ぐ

大御寶の群集に、

御懇ろな御會釋を賜はつた。

その刹那である、

群集の中の一老婦人が、

「あ、お帽子を御取りなすつた！

まあ勿體ない！」

と叫んだのは。

物(勿)體

私の目には露が
宿つた。

二千五百年の歴史が、この那須の山村の一隅の小さい民草の小さい集まりに現れたのである。

同時に私の目には露が宿つた。

群集はひつそりとした。

中には白いハンケチを

目に當てるものもあつた。

二千五百年の歴史が、

この那須の山村の一隅の

小さい民草の小さい集まりに

現れたのである。

勿體ない感激のさめぬ中にと筆を執りましたもの、粗雑ながら悦びをおわかち下さればうれしう存じます。拜具

三 昭和の日本

北原白秋

北原白秋
詩人
福岡縣の人
名は隆吉
明治十八年生

とどろけ青雲あそび

東は白んだ。

聞け、聞け、はや呼ぶ

日本のこの聲。

春が來た、春が、春が、

緑の夜明けが。

昭和だ、昭和だ、

我等が時代だ。

高鳴れ、新潮しんしほ

光はつんざく。

聞け、聞け、うづまく

日本のこの聲。

春が來た、春が、春が、

萌え、たつ夜明けが。

昭和だ、昭和だ、

我等が時代だ。

集れ、星座よ、

草木は響いた。

聞け、聞け、どよもす

萌え。

日本のこの聲。

春が來た、春が、春が、

茜あかねの夜明けが。

昭和だ、昭和だ、

我等が時代だ。

若やげ、太陽、

世界は手擧げた。

聞け、聞け、充ち満つ

日本のこの聲。

春が來た、春が、春が、

輝く夜明けが。

昭和だ、昭和だ、

我等が時代だ。

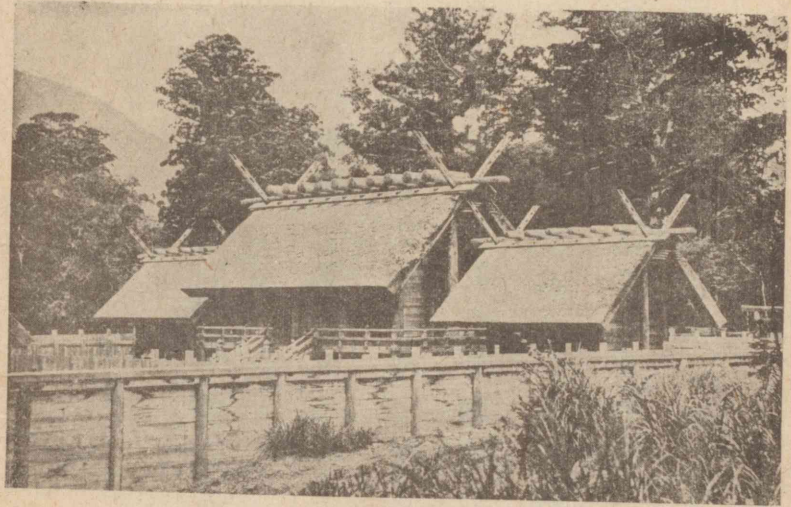
〔白秋國民歌謡集〕

四 伊勢の神宮を拜みて

俄に參宮を思ひ立ち、昨七日の夕八時に東京を發つて、今朝の十時に山田に着きました。まづ外宮を拜んで、次に内宮を拜みました。兩宮の神々しき、殊に内宮の畏かしこさは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流れに水底の小鮎あなごの數を讀みつゝ、恭しく口すゝいで、それから名も知らぬ鳥の頭上の木の間に飛び移つては、奥深く啼く音に耳を澄ましつゝ、緑青色の苔にさびた神杉の太い幹が、天を支へる柱の

兩宮の神々しき殊に内宮の畏かしこさは言語に盡くせません。五十鈴川の清き流れに水底の小鮎あなごの數を讀む。

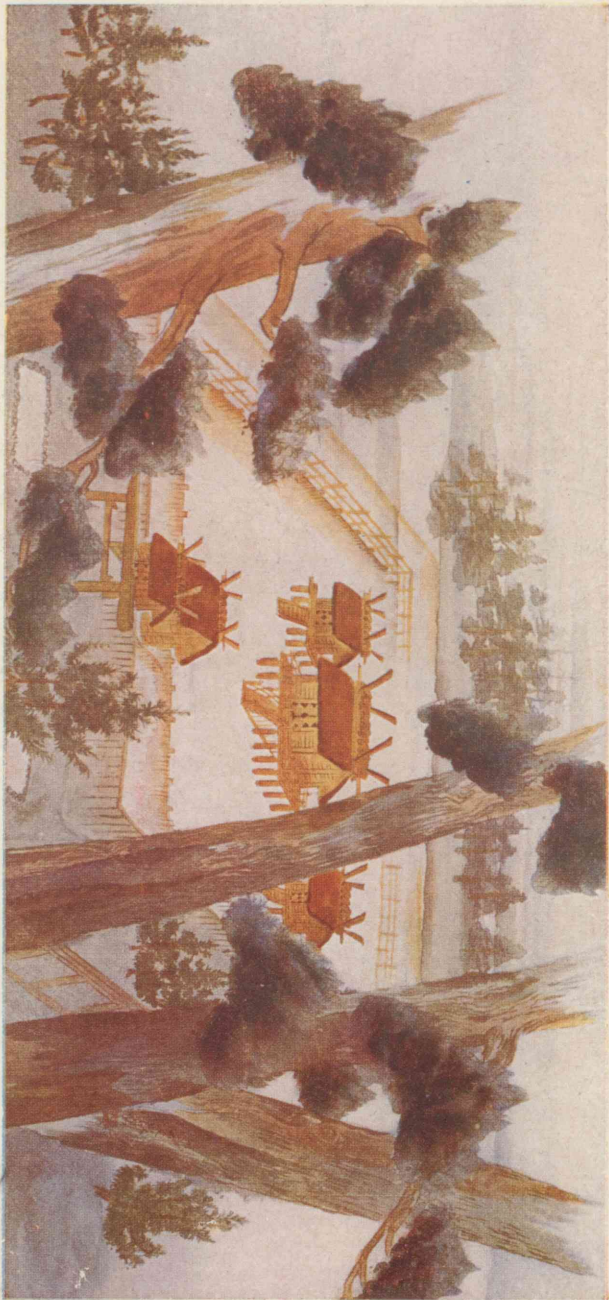
木立の奥、塀の
彼方に千木、堅
魚木の金色が拜
まれます。



内 宮 神 殿

やうに立ち竝んで居る間を
たどつて、暫く進むと、やがて
木立の奥、塀の彼方に千木、堅
魚木の金色が拜まれます。
更に進んで塀の内に入ると、
正面の御門には白布の垂幕
が長く地に曳いて静かにそ
よ風に揺られ、其の奥に、疎ら
に立つた神杉に護られて、御
白石のびっしりと敷きつめ
られた間に、神々しい白木の

(筆仙溪田富)



伊勢神宮

「何事のおはしますか知らねどもかたじけなさに
 涙とぼる」——西行法師が大御前にひれ伏して畏
 きに打たれたところ、本書の編者が「神宮は「單純」
 といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに
 拜まれます。そしてこの御社の神杉は樹木の神々し
 さを極度に現したもののやうに思はれます。」と謹ん
 で記したところ、その靈域の神韻が溪仙氏によつて
 如實に現されてゐるのである。

富田溪仙氏は明治十二年博多に生まれ、京都に出
 て郷路華春に學び、大正三年日本美術院の再興以來、
 その同人に推されて、京都畫界に重きをなしてゐた
 が、昭和十一年に逝いた。

伊勢の神宮

西行法師がかた
 じけなさに涙を
 こぼして額づい
 た小さい敬虔な
 姿を思ひ浮べま
 した。

御宮が拜まれます。私はまづお白幕の手前の石段の下に
 跪いて、小さき祈りを捧げました。そして傍らに竝んでゐ
 た老爺老婆が、柏手を打つては溜息まじりに高聲の祈願を
 繰り返すのに聞き入りながら、現の間に、西行法師がかたじ
 けなさに涙をこぼして額づいた小さい敬虔な姿を思ひ浮
 べました。

御事はかしこしわれら神杉に

みもすそ川に涙おとすなり。

口噉げ身すゝげといはぬばかりにぞ

すみくよする五十鈴川浪。

堅庭を蹴はらゝかしたまふあら神の

この森の中に鎮まりますも。
直き清き強き心をあらはして

すくく立てりたふと神杉。

神宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに拜まれます。

神宮は「單純」といふものの偉大さを極度に表現したもののやうに拜まれます。而して此の御社の神杉は樹木の神しさを極度に現はしたもののやうに思はれます。

みたらし川に口すぐ。

私共は内宮の御後ろなる神杉の根方を一面に蔽うた苔の美しさに見とれつゝもと來た道をくりかへして、みたらし川に口すぐをりしも聞ゆる笙筆築の幽寂な雅樂の音に送られて、此の神境を辭しました。そして顧みく宇治橋を渡つて、昭憲皇太后のめで聞食したといふ赤福餅に腹

をこしらへ、それから車を命じて田圃路の五十九町を志摩境の名山朝熊岳に走らせました。そして、神路山の御陰を浴び、御裳濯川の流れに肥された田圃路を、車に揺られながら、私は此の神境が大神の大御心に叶うた故由を考へました。「大神宮儀式帳」に

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御心鎮まります國と、悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるのを見れば、第一には山水の景色の類ひなさを愛でさせられたのであらう、第二には地勢氣候風土のうるはしさを愛でさせられたのであらう、第三には此の土地に永久

永久なる平和の可能性

大和民族の積極
的光明的の發展

なる平和の可能性のある事をめてさせられたのであらう、
最後には一切の消極的煩累（九斗）にわづらはされずして、皇御孫
に率ゐらるゝ大和民族の積極的光明的の發展を見そなは
すに都合のよい、心の落ちつく境と思はせられたのであら
う。など考へつゝ、折々車夫の饒舌に氣を轉じて居る中に、
いつしか朝熊岳の麓につきました。朝熊岳は、天照大御神
の御杖代（つゑしろ）として、神路山、五十鈴川の神境を定め給うた倭姫
命（みこと）の御心になつて、しばしば訪ひ登らせられ、つひに此の
山にて終らせられたといふ尊い歴史のある名山、昔から兩
宮の參拜を表參宮と呼び、朝熊の登山を裏參宮と呼んで、此
の山に詣でぬを片參宮と云つた程の由緒のある名山、聖德

倭姫命
垂仁天皇の皇女

太子、聖武天皇、弘法大師、其の他の聖達（ひじりたち）の靈跡に神さびた名
山、わづか二千尺の高さながら五六千尺以上の高山の面影
を具へた名山であります。

明日は早く奥院に詣で、午後は下山して二見にまゐり、そ
れから鳥羽の島めぐりをして、兩三日中に歸京いたします。
さやうなら。

〔水 莖〕

五 小野の道風

坪内逍遙

加茂神社鳥居前の川べり

幕の内で蛙が鳴く

ケロケロケロ!

カロカロカロ!

ケロケロケロ!

カロカロカロ!

雨々降りやれ!

ざんざと降りやれ!

小野道風

日本三蹟の一人
正四位内藏權頭

康保三年卒
年七十一

坪内逍遙

文學者、教育家

文學博士

名は雄藏

名古屋の人

昭和十年歿

年七十七

加茂神社

京都市左京區

ケロケロケロ!

カロカロカロ!

雨々降りやれ!

ざんざと降りやれ!

蛙の歌で幕があく。正面と上手、下手を、上半分を空色、下半分を綠色の幕で見切る。その上へ、長い柳の枝を暗示する紙リボン風の物が五六本垂らしてある。柳の前は川べりの積りで、土手と見せた作り物が、上手と下手とに二つ三つ。ずつと奥の正面に高さ一間餘、幅五尺ぐらゐの朱塗の鳥居。

土手に近く、穂と共で四尺五寸もある大きな筆をかついだ男、甲乙が向ひあつて立つてゐる。甲は甲の朝臣といふ書家の内弟子で、乙は乙の朝臣といふ書家の内弟子である。此の日、加茂の神社で、

正面と上手、下手を、上半分を空色、下半分を綠色の幕で見切る。長い柳の枝を暗示する紙リボン風の物が五六本垂らしてある。

時の天皇の御命
 令で、筆道の大試
 験會があつて、此
 の試験に及第し
 た者には天皇か
 ら御褒美を下さ
 るといふのであ
 る。幕があくと
 すぐ白せりよになる。



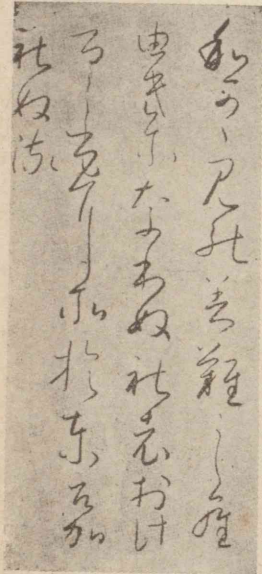
小野道風

骨折損のくたび
 れ儲け
 駄目の皮

甲 あゝ、骨折損のくたびれ儲けといふのは僕ンとこの
 先生のこつた。あんなに手習ひをして、あんなに紙や墨
 を使つたんだけれど、駄目の皮だつた。
 乙 僕ンとこのは尙ほわるいや。三度目だもの。

乙 それでも、あの小野の道風とかいふ貧乏なお公家さん
 よりはましだ。あの人は今度で四たび目だとさ。
 甲 よせばいゝのにねえ、貧乏人の癖に。今度はいよく
 身代かぎりだらう。

やがて甲乙に丙丁が加はつて、落第のつらい話、道風が失敗につい
 ての陰口、それから、今度一等になつたのは、大江の朝綱あさつなさんださう
 だから、道風が尙ほとくやしがるだらう。あいつよせばよいもの
 を、錢もない癖に、出来もしない癖に。などいひながら、大筆を川水で



傳 洗つて、さア、早く歸らう。
 道 と、四人とも下手へ入る。と、そ
 風 こへ道風と其の従者とが、柳の
 筆 蔭から出る。道風は二十五歳。
 蹟 白髪はくしの従者に、やはり大きな筆

大江朝綱
 村上天皇時代の
 漢學者、
 參議正四位下
 天徳の初に卒す
 年七十二

わが髪かみのみな白
 雪ゆきになりぬれば
 おける霜しもにぞ驚
 かれぬる。

嘲弄される

どうしてわたしは、いつまでも手が上らないだらう。

短氣は損氣

七ころび八起き

をかつかせて出て来たが、先刻から、柳の蔭で四人の話を聞いてゐたのである。

道風 (しをれて) あの者たちにまで、今のやうに嘲弄される。

ほんとにくやしいことだ。 どうしてわたしは、いつまでも手が上らないだらう？ もうこれで四たび目だ。今度こそはと思つたのに、一番にさへなれなかつた。もう逆も駄目だ。 思ひきらう。……おい、其の筆をおよこし。 叩き折ッちまふから。

ト筆を取らうとする。それをとめて、

從者 そんなお氣短なことをなすつちやいけません。 短氣

は損氣だと申します。 それから、あの七ころび八起き

目ぼしい品物

一生懸命になつて、もう一度御勉強なすつて御覽なさいまし。

とも申します。 マァ、お氣長に御勉強なさいまし。

道風 駄目々々！ もうわたしは駄目だよ。 勉強しようたつて、第一、もう紙や墨や筆を買ふ資本がない。 目ぼしい物は、大概賣つたり質に入れたりしたから、家は空家も同然ぢやないか？ 事によると、食るのにすら困るかも知れない。 お前にも暇をやるから、どツかもツといところへ奉公なさい。 わたしに附いてゐた日にや、どんな目にあふか知れないから。

從者 とんだことをおつしやいます。 わたくしは、どうしたつて、あなたが御出世なさるまでは、おそばを離れません。 マァ、一生懸命になつて、もう一度御勉強なすつて御

覽なさいまし。

道風 駄目だよ。もうわたしはあきらめた。その筆をおよこし。折ッちまふから。

又取らうとする。

從者 あ、いけませんよ。いけませんよ……

この少し前から蛙が又鳴きはじめる。

從者 お、雨がぼつ／＼やつて來ました。お家が遠いから、お歸りの途中で、大ぶりになるといけません。どこかそこいらで蓑笠を借りて來ませう。

と行きかける。

道風 あ、これ／＼。その筆をおいていつてくれ。

從者 おいてッて、折られちやア大變です……へい／＼、すぐ歸つて參ります。

筆をかついだまゝ、下手へ入る。

此の間やはり蛙は鳴きつゞけてゐる。

ぼつ／＼やつて
來た。

道風 (空を仰いで) あゝなるほど、ぼつ／＼やつて來た。しかたがない。あれが歸つてくるまで、あの木のかげで雨やどりをしてゐよう。

柳のかげへ姿を消す。

蛙の歌がとぎれる。

と下手から、次ぎの歌をうたひつゝ、「雨」が踊つて出る。

ぼつ／＼ぼつ／＼!

ぼつ／＼しよ!

ぽっつりぽっつり！

ぽっつりしよ！

わたしの手鞠や 豆粒手鞠

蜘蛛の巣のよな 絹絲かぶり

一つ突きや ぱアらばら！

二つ突きや ざんざ！

やっとなんく！

すっとなんく！

ぼんとはずめば天へも戻る。

戻る途中で柳にかゝりや、

銀か？ 眞珠か？ 水晶まるとの玉か？

パイかりぴかりとひかります！

踊つて舞臺の真中できまる。と、蛙が次ぎの歌をうたひつゝ、踊つて出る。其の間「雨」は正面に控へる。

雨々 ふつて來た。

山にも川にも ふつて來た。

畑にも田にも ふつて來た。

お芋の葉はたにもざんざ！

柳の葉はたにもざんざ！

おいらの面おもてにもざんざ！

カロカロカロ！

ケロケロケロ！

カロカロカロ！

おいらの面にも
ざんざ！

ケロケロケロ！



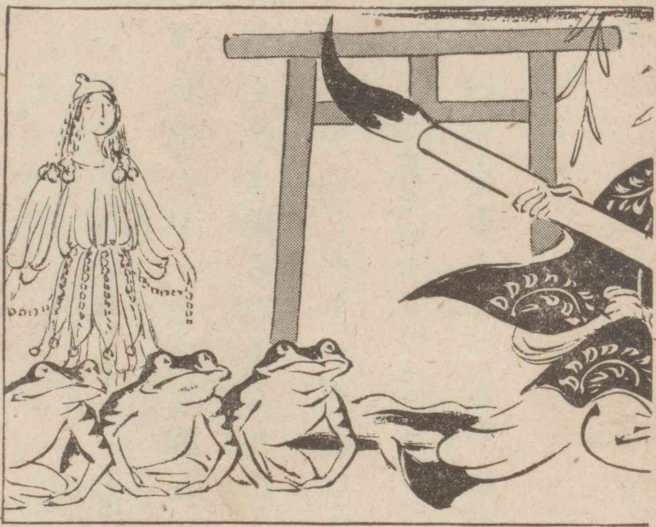
この歌に合はせて「雨」と「蛙」とが一しよになつて踊る。そして蛙

は、始終、鞭抜ひにされて飛びあがつたり、跳ね廻つたりする。とりわけ「ぼんとはずめば」といふ文句のところでは高飛びをして垂れてゐる柳の枝に飛び附かうとする。さうして、幾度も落ちては轉ぶ中に、ト、一等小さい蛙が高飛びした拍子に、枝へ飛び附いてぶらさがる。さつきから此の様子を見て居た道風が柳の蔭から出て来る。

負うた子に教へられて、淺瀬をわたるといふことがあるが、わたしのお師匠さんはあの蛙だ。

根氣よく勉強する。

たつた五たびやそこいら失敗したからつて、絶望しようとしたのは意氣地なしだ。



道風 負うた子に教へられて

淺瀬をわたるといふことがあるが、わたしのお師匠さんはあの蛙だ。あんなちっぽけな動物でも、一生懸命になつて根氣よく勉強すると、あんな高いところの枝へでも飛び附くことが出来る。それなのに、わたしは人間でありながら、たつた五たびやそこいら失敗したからつて絶望しようとした

のは、意氣地^{いけぢ}なしだ。さうだ。死んぢまふまでは何度もくやつて見よう。あゝ！考へちがひをしてゐた。

從者が蓑と笠を持って下手から出て来る。

從者 おやく！ そんなとこにいらしって、お濡れになりませう、幾らか小ぶりにはなりましたけれど。さアさア、早くこれをおめしなさいまし。

と蓑を着せようとする。

道風 いゝえ、そこどころぢやないよ。わたしはえらい發明をした。

從者 へい？

此の廣い天や地や野や山を草紙にして、海や川を硯と見立て、風雨雷電の働きを永字八法とも心得て、まづ「いろは」から習ひ直すよ。

道風 今ね、蛙が雨に濡れながら、あの柳の枝へ飛び附かう、飛び附かうとして、とう／＼十五六たび目に飛び附いたのを見て、あゝ、今までは、人間の癖に、意氣地がなかつたと悟つたよ。

從者 おやく、それは結構でございます。

道風 わたしは、これからは、あの蛙の眞似をして、此の廣い天や地や野や山を草紙にして、海や川を硯と見立て、風雨雷電の働きを永字八法とも心得て、まづ「いろは」から習ひ直すよ。……おい、その筆をお貸し！

從者 折つちやいけませんよ。

道風 なんの折るもんか！……御覽！ いゝかい？

道風は両手で筆を握つて、まづ二つ三つりうくと揮つて見る。
この少し前に「雨」と「蛙」が又前へ出てくる。そして、互ひちがひに
雨ざざんざ！ ざんざ！

びっしより びっしより！

びっしよりこ！

蛙 カロカロカロ！

ケロケロケロ！

カロカロカロ！

ケロケロケロ！

と歌ふ間に、道風いろはにはへと「からゑひもせず」まで、空中に向つて縦横に大文字に書く。書き終ると、従者を見返つて、得意さうに、
道風 どうだ？ 見たか？

どうも實にお立派でした！
どうも實にお見事でした！

相馬御風

文學者

名は昌治 新潟

縣の人

明治十六年生

良寛

歌僧

俗名山本榮藏

越後國(新潟縣)

の人、天保二年

(元)寂、年七

十四。

従者へい、どうも實にお立派でした！ どうも實にお見事
でした！

道風 これですっかり生れかはつた。 さア、急いで家へ歸らう。

従者は蓑を道風に着せ、笠を渡し、筆を受けとり、道風の伴をして下
手へ入る。(幕)

〔家庭用並びに學校用脚本〕

六 良寛さま

相馬 御風

良寛さまの習字

良寛さまはたいそう字が上手でした。昔から日本中に
幾人ともならぶ人がないほどに上手でした。
しかし、良寛さまは一生手習をやめませんでした。 托鉢

の途中で休んでゐる時なんかでも、良寛さまは棒切や指で、砂や土の上に字を書いたり消したりして習字をしました。或人が良寛さまに習字のしかたをたづねますと、良寛さまは、

一所(今は一生とも書くことがある)

「いゝお手本で一所懸命習ふがいゝ。それからお手本を習ふ時にはお手本の字ばかりを見て、自分の手もとを見てはいけない。さうすればきつといゝ字が書ける。」と教へました。

漱嗽

それから又良寛さまは、その人に空中習字といふことも教へました。朝早く起きて口を漱ぎ、顔を洗つた後で家の外に出る。そして朝の空をながめる。朝の空をながめ

るのは氣持のいゝものだ。そのいゝ氣持で、こんどは空に向つて右の手をぐんと伸ばす。そして空一ぱいに大きな字を書く。空はかぎりなく廣いから、どんな大きな字でも書ける。そこで、毎朝それをつゞけるのだ。「一」といふ字でも、「神」と言ふ字でも、「佛」といふ字でも、何でも自分の書きたいと思ふ字を、毎朝早く起きて何度も何度も空一ぱいに大きく書くのだ。それが一等いゝ習字法だ。

かういふ

かういふのが良寛さまの空中習字の法といふのでした。良寛さまはこの毎朝のけいこを何十年もつゞけました。そしてあのやうにのびくした立派な字が書けるやうになりました。

父のかたみ

良寛さまのお父さんは山本左門泰雄と言つて、たいそう學問のあるえらい人でしたが、六十の年に京都でなくなり
ました。

良寛さまはそのお父さんの書いた掛物を壁にかけて、死ぬ日まで毎日々々それを拜んでゐました。それには、

朝ぎりに一段ひくし合歡の花

以南いなん雅な疏しゆ

と書いてありました。以南といふのは、良寛さまのお父さんの別の名でした。良寛さまはその掛物の隅すみに小さく、

水莖ミズクキの跡は涙にかすみけり

ありし昔のことをおもへば

水莖

といふ歌を書き添へました。それは昔のことを思ふと涙が出て来て、懐かしいお父さんの字さへよく讀めないといふ意味です。

また良寛さまはお父さんのその發句はつぐを讀んで、

朝ぎりの中に君ますものならば

はるゝまにくうれしからまし

といふ昔の人の詠んだ歌をも書きました。

それは、お父さんの發句にある朝霧の中に咲いてゐる合歡の花のやうに、若しお父さんも霧の中にかくれておいてなるのならば、霧がはれる度にお父さんにも逢ふことが出来て、どんなにうれしいことだらう。けれどもお父さん

詠讀

ます

は霧の中においてになるのでなくて、死んでおしまひになつたのだ。——かういふ悲しいおもひをあらはすために、書かれたのでした。

良寛さまはそれほど孝心のふかい人でした。また良寛さまの歌に、

たらしねの母のみ國と朝夕に

佐渡が島べをうち見つるかな
といふのがあります。

良寛さまのお母さまは佐渡の國の人でした。此の歌はお母さんの亡くなつた後、

「あゝ、あそこがお母さんのお生まれになつた佐渡が島だ。

佐渡
新潟縣佐渡郡。
新潟の西方の海
中に在る

お母さんがもつと生きてゐてくださつたら……」といふやうな悲しい氣持で、朝に晩に佐渡が島をながめては、亡くなつたお母さんを思つてゐたといふことを詠んだのです。これだけを見ても、良寛さまがどんなにお母さんにも孝行であつたかといふことがよくわかります。

良寛さまと百姓

良寛さまの歌に、

この頃は早苗とるらしわが庵は

形かたを繪にかき手向けこそすれ

といふのがあります。これは一たいどういふ事を詠んだのでせうか。

詠詠

ませう。

先づその歌の意味だけをざつとお話して見ませう。

「あゝ、いつの間にかもう田植をする時節になつた。この



良寛像

頃はあつちの村でも、こつち

の村でも、みんな田植をする

のに忙しく働いてゐること

であらう。御苦勞なことだ、

ありがたいことだ。それで

私のところではその田植の

様子を繪にかいて、それを床の間に掛けて、佛さまと同じや

うに拜んでゐる。そして『お前さま方がこのやうに働いて

下さるおかげで、私達はかうやつてお米を食べさせて貰つ

ありがたう。

てゐます。ありがたうございます。』とお禮を言つたり、それ

から又『どうぞ今年も稻が立派に育ちますやうに、そしてよ

く實のりますやうに。』と、佛さまにお願

ひしたりしてゐる。』

かういふのです。

この歌だけでもわかるやうに良寛

さまは毎年農家の忙しい頃になると、

村の人達の一所懸命に働いてゐる有

様を繪にかいて、それを壁にかけて、佛

さまと同じやうにその前でお經をよ

んだり、拜んだりしてゐました。つまり良寛さまは、百姓の



良寛愛用の穂(自作)と茶碗

姓一性

仕事を佛さまと同じやうに尊んで居たのです。

「何が尊いといつて、百姓の仕事ほど尊いものはない。そのおかげで私達はみんなかうして養つて貰つてゐる。百姓の仕事を真劍まけんにしてくれる人がなかつたら、日本の人間はみんな餓死うゑじしてしまはなくてはならない。さう思ふと百姓は佛さまと同じだ。百姓こそ本當に日本の國の寶だ。」
良寛さまはいつもさう言つては、村の人達を尊んでゐました。

うゑじに
さう

「良寛さまこそ本當に佛さまです。良寛さまほど立派な心を持つた人はありません。私たちのやうな心の曲りやすい者は、良寛さまのやうなえらいお方に教へていたゞかなければ、どんなに悪くなるかも知れたものでありません。」

村々の人達は、さう言つては良寛さまを佛さまのやうに敬つてゐましたが、良寛さまの方では、

「いえ、さうではない。お前さまたちの心こそ本當に佛さまと同じだ。お前さまたちが、そのやうに一所懸命働いてくださるおかげで、私たちは生きさせて貰つて居るのぢや。尊いことぢや、ありがたいことぢや。」

ぢや

かう言つては、村の人達を拜むのでした。

いつも良寛さまのかう言ふ言葉を聞いてゐた村の人達は、ますます良寛さまをえらいと思ひました。それと共に自分たちの仕事のほんたうに大切なことをも深く考へる

ぐく

やうになりました。

「私たちの仕事も、良寛さまさへあんなに言つてくださるのだから、ほんたうに大事にしなくてはならない。尊い仕事だ。ぐづくしては居られん。眞劍に働かなくてはならない。」

かうして良寛さまの言葉と行とに勵まされて、村々の人達はだんぐいゝ人となつて行きました。

あんまり日でりや雨がながく續いたり、あんまりわるい風が吹いたりすると、良寛さまは佛さまの前に、「どうぞ田圃や畑の物にさはりのありませんやうに。」と一心に祈りました。

村の人たちはそれを見ると、

「良寛さまのやうなえらいお方が、あのやうに佛さまにお頼みしてくださるのだから。」

と言つて、元氣を出して働きました。

かうして良寛さまも、良寛さまを知つてゐる村の人達も、

みんなしあはせてした。

〔良寛さま〕

山を下つた 良寛さまは

村の子どもと 毬ついで居たが

山に歸つた 良寛さまは

寺に一人で さむしかろ

〔島木赤彦〕

七 菖蒲の節供

島崎 藤村

島崎藤村
名は春樹
詩人 小説家
明治五年(三五三)
長野縣生
花祭
四月八日釋迦降
誕の日花をたむ
ける祭事
クリスマス
十二月二十五日
の基督降誕祭

國民の記念日でもなく、氏神の祭禮でもなく、また卯月八日の花祭とか、暮のクリスマスとかのやうな宗教的の祭日ではないまでも、一年に二度の節供の祝が、たゞ幼い者のためにあるのは嬉しい——女の兒のためには三月の桃の節供、男の兒のためには五月の菖蒲の節供のあるのは嬉しい。あの三月の節供に取出されて、今に合唱でもはじめさうな雛や、古風な少年音楽隊のやうな五人囃子の代りに、五月の節供を祝ふためにあるものは、鍾馗や、鬼や、金時や、桃太郎などの行列である。五月の空に高く翻る鯉幟は、恰も子供

鍾馗
支那で疫鬼を驅るといふ神

子供の國をそこに打建てたかのやうにも見える。

の國をそこに打建てたかのやうにも見える。 狹苦しい町の中にあつても、あちこち、屋根の上に鯉幟を望むのは楽しい。 鱗を描いた魚の形、長い尾、大きな眼、空にかゝる金と赤と黒とのあの色彩、動きを悦ぶ子供の心を樂しませるやうなあの飛揚。 大人の心をも子供の心に返すものは、あのはたゞと風に鳴る鯉幟の音である。

その他、五月の節供を祝ふものは、室内にも屋外にもあつて、軒に葺く菖蒲までがお伽噺の情調を誘ふのも懐かしい。 五月の節供を迎へる頃は、何と言つても季節の感じが深い。 桃や櫻は過ぎ去り、椿や木蓮にも遅く、山吹や藤や満天星などの花が香氣を放つ五月の初は、一年中の最も楽しい季節

菖蒲

の一つである。遠い山々へはまだ雪の來る日があつて、雨でも降れば^{アハレ}裕では寒いこともあるが、私たちの周圍はもはや若葉の世界である。この好い時候に、楽しい菖蒲の節供がやつて來る。

桃の花が女の兒にふさはしいやうに、菖蒲はおのづから男の兒にふさはしい。一ふし^{スエト}鋭いところのある葉の形も好い。爽か^{サカサカ}てみづ／＼しい葉の色も好ましい。あれを軒にかけるといふことも優^{オトク}しい風俗だと思ふ。一年に一度の菖蒲湯がたつて、あの香氣が人を酔^ヨはせるばかりでなく、私たちの身をも心をも温めてくれるのも嬉しい。青々とした菖蒲の浮いてゐる中を搔^カ分けて湯槽^{アノ}に浸^ヒるのも樂し

みだし、あの葉が私たちの肌などへべたつとついたときの心持もわるくない。

粽の香は幼い日の香である。粽ばかりは鄙^{ヒノチ}びた處で作られるものほど好い。あの細長い笹の葉の卷付けてあるのを解いて、青い色に蒸された香を嗅^かいだ子供頃の心持は、今もなほ忘れられない。粽の外に、柏餅^{クハシモチ}、赤飯などと數へて來ると、五月の節供を祝ふもので、何がなしに懐^ナかしい思を誘はないものはない。私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。

〔藤村讀本〕

粽の香は幼い日の香である。

私たちの少年時代は、まだ軒の菖蒲にも残つてゐるやうな氣がする。

八 苺

初夏と梅雨とを思ふと、直ぐに私の心を躍らせるものがあります。

苺です！ 私は苺なしに、春から夏に越えることが出来ません。

水菓子の類の中で、私に取つて苺ほど美味しいものはありません。で、其の培養には一番に骨を折ります。他の草木に一度か二度やる寒肥を、苺には三度からやるのも、その爲めです。

五月から六月にわたる苺の盛りの二十日間は、私に取つて實に舌の御正月です。同時に腹の御正月でもありません。

五月から六月にわたる苺の盛りの二十日間は、私に取つて實に舌の御正月です。同時に腹の御正月でもありません。朝早く起きて

り、目の御正月でもあり、頭のお正月でもありません。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、其の間に真紅の珠の見え隠れに連つて居るのを見た時の心持。

雨戸を一枚繰る。寝衣のまゝ直ぐに飛び出して、跣足で朝露を踏んで苺畑に行く時の心持。莖の長い濃緑の厚い葉が、銀のやうな朝露に光つて、其の間に真紅の珠の見え隠れに連つて居るのを見た時の心持。脚は膝まで、手は二の腕まで葉末の露にひたして、丸々した紅玉を草の枝から目籠に移す時の心持。一つの房に真赤のから桃色、桃色のから白と、尖頭になるほど段々小さくなつて、行儀よく鈴生りになつて居る、其の中から、小さい若いのを痛はりつゝ、本生りの大きい真赤なのを摘み取る時の心持。摘み終はつて、目籠に山なす紅玉を携へつゝ、朝日に照らされて、足をすゝいで、家に入る時の心持。綺麗に洗つて、大きな古今里の皿に

目籠に山になつた紅玉

舌鼓を打つ

盛つて、食卓に安置して、家内揃つて舌鼓を打つ時の心持。
あゝ何といひませう。

或人は「文明とは家族一緒に卓を圍んで苺を喰ふことなり」と云つたと申しますが、私は百姓をやりつゝ、而して本を讀みつゝ、苺を喰ふといふ事に於いて、野蠻と文明と、土の趣味と天の趣味とを、同時に攪み得たやうに思ひます。

咽喉から佛になる

苺は澤山取れますが、一々砂糖をかけて食べることは、とても私共の能くする所ではありません。それ故大抵は鹽をふりかけて食べます。それで、非常に結構です。一週に一度位は破格に砂糖を添へます。一倍うまく感じます。稀には砂糖の外に牛乳を添へます。實に咽喉から佛になる

私の郷里
山形縣米澤市

やうに感じます。かういふ場合に、子供等は、頭が笊ざるになりさうだと云つて喜びます。何の事だか知りませんが、私の郷里では、非常にうまい物を食べた時に「頭が笊になる」といふのです。

餘つた時にはジャムを作ります。ジェリーも拵へます。又苺酒なども作ります。そして或はパンにつけて賞味し、或は夏時分の飲料に致します。

私の苺畑は八疊間の三四倍もありませう。それで一春に、水菓子屋から買へば彼れ是れ十圓位に値する紅玉ベニタマが取れます。其の外に一昨年などは、春は其の畦の間に甲州馬鈴薯マリスサを作つて二斗以上も取りました。秋は練馬ネギマを作つて

相撲取の腕のやうな奴を百本以上も取りました。春の紅玉は其の副産物として夏の茶褐玉とびいろと秋の雪白根せつぱくこんとを與へて呉れるのです。

美味うまいい話ばかりして、つい其の出處を言ふのを忘れて居りましたが、私の苺は六年前に余丁町の坪内先生から戴いて、片手に軽々と提げて來た、それが蕃殖ベンシヨクして今日の隆運を來たしたのであります。

〔野草集〕

ついで

余丁町
東京市牛込區内
坪内先生
坪内逍遙

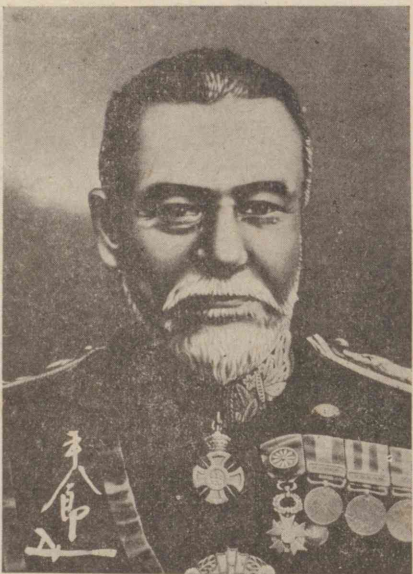
水野廣徳
日本海海戰當時
海軍大尉
豫備海軍大佐
愛媛の人
明治十年生
五月十四日
明治三十八年

九 此の一戰

水野廣徳

露國の第二第三艦隊は五月十四日を以て佛領安南なるホンコーへ灣を發し、浦鹽斯穗に向つて北進の途に就いた。

抑、露國艦隊が浦鹽に入るには、朝鮮海峽、津輕海峽及び宗谷海峽の三通路がある。而して彼等が其の中の何れを通



過するかは、其の選擇一
東に提督ロゼストウエン
郷スキーの方寸にあるべ
元きことで、他人が地形其
帥の他戰略上の利害によ
つて推定し得べきこと

方寸にある。

全勢力を合はせても、纔かに敵と拮抗し得るだけであつた。
到底勢の許さざる所

ではなかつた。翻つて、我が聯合艦隊を見ると、全勢力を合はせても、纔かに敵と拮抗し得るだけであつた。これを分割して三水道を守るが如きは到底勢の許さざる所である。

徐ろに局面の推移に應ずることにした。さて困つたのは敵の艦隊の消息の知れぬ事であつた。

その動靜は杳として全く知ることが出来ぬ。

是に於いて我が聯合艦隊司令長官東郷大將は、敵に最も近くして、且つ戰略上敵に遭ふ機會の最も多き朝鮮海峽に、先づ全力を集中して、徐ろに局面の推移に應ずることにした。かやうに策を定めたものの、さて困つたのは敵の艦隊の消息の知れぬ事であつた。彼等がホンコーへ灣を出發してから、もう十餘日になる。彼等が此の海峽に出現すべき最長期限は將に盡きんとして居るが、その動靜は杳として全く知ることが出来ぬ。彼等は果たして此の海峽を指して來るであらうか、或は津輕海峽を志すであらうか。従つて、我が艦隊はこのまゝ朝鮮海峽にとゞまるべきであらうか、或はこゝを捨て、北海に轉ずべきであらうか。これは

金甌無缺の神州に疵をつけることにならうであらう。

東郷大將は、敵艦必ず朝鮮海峽に來るべしと推斷した。而して七段の戦法を定めて鶴首翹望して敵艦の來航を待ち受けた。

實に容易ならぬ問題であるが、しかも此の裁斷は實に帝國興廢の岐るゝ所で、若し選擇を誤らば、金甌無缺の神州に疵をつけることになるであらう。これは實に稀世の英雄豪傑と雖も、迷はざるを得ざるところ、而して自己の信ずる所に赴くより外に道のない所である。而して我が東郷大將は、敵艦必ず朝鮮海峽に來るべしと推斷した。而して其の艦隊を鎮海灣に伏せ、七段の戦法を定めて、鶴首翹望して敵艦の來航を待ち受けた。

さる程に五月廿七日の午前五時、各艦の無線電信機に一つの警電を感じた。

「敵第二艦隊見ゆ。」

彼等の面は晴ればれして意氣凛然、兜に香は焚かねども、帽章の櫻花は燦として光を放つの概があつた。

敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出發、之れを撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。戦はずして既に敵を壓するの概あり

待ちに待つた敵の艦隊が來たのである。君國に報ゆるは今日ぞ、死後の恥をば遺さじと、將卒はまづ衣服を改めた。彼等の面は晴れくとして意氣凛然、兜に香は焚かねども、帽章の櫻花は燦として光を放つの概があつた。

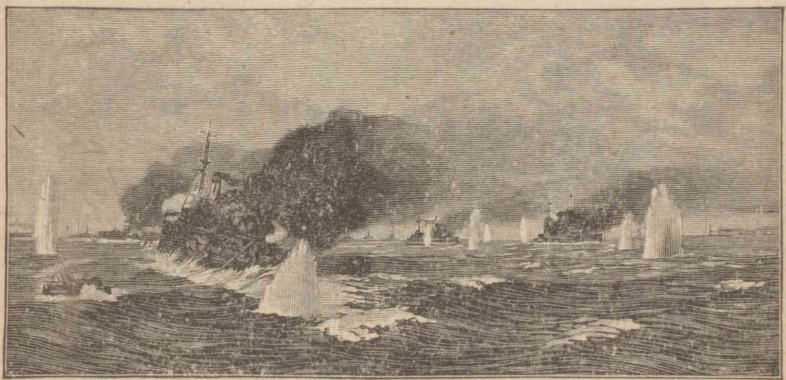
東郷司令長官は此の飛電に接すると、直ちに全艦隊に對して急速出港の命を下した。同時に、大本營に宛て、左の電報を發した。

「敵艦見ゆとの警報に接し、聯合艦隊は直ちに出發、之れを撃滅せんとす。本日天氣晴朗なれども波高し。」

其の語の詩的なる、其の意氣の豪壯なる、戦はずして既に敵を壓するの概ありといふべきである。

斯くて、我が主力艦隊の各艦艇は、逐次錨を抜いて豫定の航行序列を作り、午前七時を以て全艦隊残らず根據地を出發した。聯合艦隊司令長官東郷海軍大將は、まづ其の將旗を高く旗艦三笠の大檣頭に翻した。而して戰艦三笠、敷島、富士、朝日、装甲巡洋艦春日、日進の六隻より成る第一戰隊を直率し、三須第一戰隊司令官をして日進に坐乗し、隊の後尾を固めしめて、親ら列の最先頭に進んだ。上村第二艦隊司令長官は、出雲を旗艦とし、装甲巡洋艦出雲、吾妻、常磐、八雲、磐手の五隻より成る第二戰隊を率ゐて第一戰隊に續いた。島村第二戰隊司令官は、將旗を磐手に揚げて、其の後殿に備へ、瓜生第四戰隊司令官は、巡洋艦浪速、高千穂、明石、對島の四

雄姿堂々海を壓して陣の延長實に五海里、並び立つ檣桁は電柱の連るが如く、空に靡く噴煙は雲龍の天に昇るが如くであつた。



日 本 海 大 海 戦

隻を率ゐて總殿軍を承つた。其の他通報艦、驅逐艦、水雷艇等は、各本隊の側に後に附隨する。雄姿堂々海を壓して陣の延長實に五海里、並び立つ檣桁は電柱の連るが如く、空に靡く噴煙は雲龍の天に昇るが如くであつた。

やがて東郷司令長官は、哨艦和泉の報告に依つて、敵艦が五島宇久島の北西約二十五海里に在つて、東水道に向つて進航しつゝあることを

洪波を蹴つて沖の島に向つた。

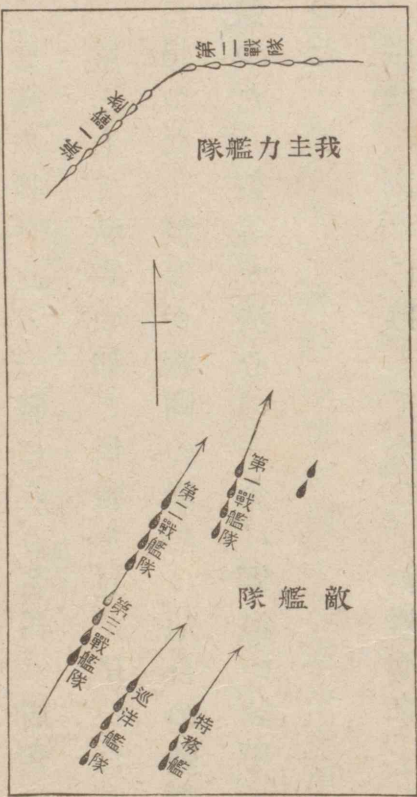
知つた。而して敵艦隊の速力を十二海里と推定し、敵を沖の島附近に邀へ撃たんと決心して、行く／＼戦闘準備を整へつゝ、洪波を蹴つて沖の島に向つた。彼我の艦隊は刻々に相近づく。近づくまゝに、敵情に關する電信がいよ／＼頻繁となる。かくして我が主力艦隊は、正午に至つて、沖の島の北方約十五海里の地點に達したが、まだ敵艦の影が見えぬ。東郷長官は、空しく停止して敵を待つよりは、むしろ進んで彼等を邀へ撃たうとして、山の如き逆浪を突切つて進みに進んだが、午後一時四十分になつて、我が主力艦隊は左舷南方數海里にあたり、始めて濛氣を破つて進み來たる敵の全艦隊を發見した。見よ、敵の精銳スウオロフ型の戦

大小合はせて三十餘隻の艦船が大戦闘旗を橋頭に翻しつゝ、眞一文字に進航して来るではないか。

艦四隻が右翼列の先頭に立つて居るのを。つゞいてオスラービヤ・シソイヴエリーキーナワリンナヒーモフより成る一隊が稍、後れて左翼列の先頭に在るではないか。ニコライ一世・アブラクシン・セニャーウキン・ウシャーコフより成る一隊がこれに次ぎ、ジエムチウグイズムルードの二艦が驅逐艦數隻を率ゐて右翼列の右前方に進んで来るではないか。而してオレーグ・アウローラ・ドンスコイ・モノマーフの一隊、其の他の巡洋艦、並びに特務艦、驅逐艦等が連綿として兩列の後方に續き、大小合はせて三十餘隻の艦船が大戦闘旗を橋頭に翻しつゝ、北々東の針路を執つて眞一文字に進航して来るではないか。

敵艦隊を睥睨してゐた

東郷大將は參謀長以下の幕僚を率ゐ、三笠の前艦橋に立つて敵艦隊を睥睨してゐたが、之れを見ると、直ちに各艦に



本日海戦彼我陣形

戦闘準備を命じた。而して先づ敵の勢力の薄弱なる左翼部隊を撃ち

破らうと決心して、戦闘速力を以て斜に敵の針路の前方を横斷した。同時に、第四戦隊は他の巡洋艦と行動を共にせんが爲め、主力艦隊と分離して、敵の後尾に對して運動を開

此の時である、
旗艦三笠の檣頭
に、國民の血を
煮え立たした名
高い歴史的信號
が颯と高く翻つ
たのは。

昂つた將士の意
氣は更に昂つ
た。彼等が報國
の赤心は旭日の
戰鬪旗とその色
を競つた。

砲は彈を孕んで
射手の指は既に

始した。各驅逐隊は敵を避けて、艦隊の非戰側に移つた。
此の時である、旗艦三笠の檣頭に國民の血を煮え立たした
名高い歴史的の信號が颯と高く翻つたのは。

「皇國の興廢此の一戦に在り、各員一層奮勵努力せよ。」

嚴として秋霜の如き信號を見て、昂つた將士の意氣は更
に昂つた。彼等が報國の赤心は旭日の戰鬪旗とその色
を競つた。彼等が決心の一念は鋼鐵の装甲よりも尙ほ堅か
つた。

戰機は刻々に熟して來た。距離測定士の報ずる聲は、や
がて「九千米突！」と響いた。つゞいて「八千五百米突!!」と響
く。もう十二吋砲の有効距離に入つたのである。砲は彈

引金に懸つて居
る。互に滿を搾
つて放たぬ狀
は、まさに兩虎
嶋を負うて相對
し、雙龍雲を捲
いて相向ふとも
いふべきであら
う。
將卒は肉を躍ら
し汗を握る。千
古の偉觀であ
る。

を孕んで、射手の指は既に引金に懸つて居る。しかも敵も
發たねば我れも放たぬ。互に滿を搾つて放たぬ狀は、まさ
に兩虎嶋コウカを負うて相對し、雙龍雲スズリウンを捲いて相向ふともいふ
べきであらう。搏擊ハツキの機は刻々に逼つて、將卒は肉を躍ら
し汗を握る。千古の偉觀である。曠世クワンセイの壯觀である。

〔此一戦に據る〕

一〇 遅かりし一時間

東郷大將に率ゐられた我が聯合艦隊が、哨艦信濃丸の警
電によつて、バルチック艦隊の出現を知つたのは、明治三十八
年五月廿七日の午前五時であつた。而して同じ日の午後

國民の頭上を蔽つた「もしや」の疑雲が飛散し盡くして、隆々たる國運がいや興りに興ることとはなつた。

一時四十分にいよく敵艦の影を見出だして、やがて「皇國の興廢此の一戦に在り。」

の壯烈な信號が掲げられ、やがて興廢が此の一舉に決せられ、國民の頭上を蔽つた「もしや」の疑雲が飛散し盡くして、隆々たる國運がいや興りに興ることとはなつた。

この五月二十七日に先だつこと二日！

明治三十八年五月二十五日の朝である。琉球の那覇港を發した一帆船が、宮古島を指して進航したが、しばらくすると、遙か行手の朝霧のうちに、ぼんやりと黒い影を見出だした。

「島影か？」

帆船は疑つた。けれども、あの方角に島のある筈がない。「方向を誤つたのであらうか！」いや、其のやうな筈もない。訝りながら船足を緩めつゝ、よくよく見ると、汽船か。軍艦か。とにかくかすかに黒い煙が棚引いて居る。

更に近づいて凝視すると、一隻ならず、二隻ならず、夥しい數の、しかも軍艦が四十餘隻、白浪を蹴つて進んで來るのが、ハッキリと見える。

バルチック艦隊に相違ない。

帆船は驚いて、舵を返して一目散に逃げ出した。其の影が敵艦に認められて、彼れも怪しいと思つたのであらう、す

凝視する。

一目散に逃げ出す。

快速力で追ひかけて来た。

虎口を遁れた帆船は、死物狂ひに宮古嶋に漕ぎつけて、早速之れを島廳に報告した。

地だんだ踏んで残念がつたが、窮餘の策として遂に一大冒險の敢行を決議した。

ぐに二隻の軍艦が、快速力で追ひかけて来た。そして段々に近づいて、一海里半ばかりの所まで迫つたが、何と思つたか、急に方向を轉じて、本隊に引返した。

虎口を遁れた帆船は、死物狂ひに宮古島に漕ぎつけて、早速之れを島廳に報告した。

島は引ヅくりかへるやうな騒ぎである。「皇國の興廢」はここにも感ぜられて、彼等は興奮し焦躁する中にも、一刻も早く其の筋に報告せねばならぬと考へたが、如何にせん此處には海底電線が通じてゐない。彼等は地だんだ踏んで残念がつたが、窮餘の策として遂に一大冒險の敢行を決議し

た。それは海底電線の通じて居る八重山の石垣島まで急使を仕立てようといふのである。折しもの風波を冒して六十餘里の海上を横切らうといふのである。而も小さい一葉の刳船に乗つて、風浪の險惡を以て世界に名高い此の荒海を乗り切らうといふのである。

やがて大冒險の航海使者が募られた。そして競つて舉手する志願者の中から、四名の屈強な青年が選まれた。

彼等はやがて用意された刳船に飛び乗り、風浪の音に競ふ島の同胞の「萬歳」の聲に送られつゝ、鐵腕を振つて漕ぎ出した。島を擧つた幾千の群集は、舟の影の見えなくなるまで、ぢつと立つてゐたが、影を見失ふとひとしく、申し合はせ

たやうに、うなだれて瞑目した。そして、

「敵艦に見つかるな！」

「無事に使命を果たせ！」

と、口々に祈念した。

勇敢なる青年水夫は、眠らず、休まず、飲まず、食はず、六十里の荒浪を一氣に乗り切つて、其の日の眞夜中、無事に八重山に着いた。そしてすぐに電信局にかけて此の一大事を報告した。

局は無論直ちに其の筋に打電した。そして、報告はやがて東郷司令長官の手に達したが、時は惜むべし、彼れ早くこれ遅く、既に信濃丸が旗艦三笠に敵艦見ゆと報告した約一

彼れ早くこれ遅く

時間後であつたのである。

(稻垣國三郎の稿に據る)

一一 大海原の歌

坪内逍遙

坪内逍遙
(前出)

大いなる哉大海原、

朝に夕べにどろくと、

動き、轟き、夜もすがら、

大浪小浪寄せ返る。

いづこに打たぬ浪を見ん、

いつ浪の音を聞かざらん。

ゆふべーゆうべ

不増不減の瑠璃
の色

大いなる哉大海原

世界の山々ことごとく

崩すとも海はうまるまじ

世界の川々絶間なく

注げども海はとこしへに

不増不減の瑠璃の色

長閑けき様は海にあり

風なきはてし春の沖に

朧にうつる月見れば

あらぶる心もな
ぎぬべし

蓬萊山もよそな
らず

あらぶる心もなぎぬべし

松島かげの朝ぼらけ

蓬萊山もよそならず

凄じさはた海にあり

春秋二季の大あれに

はやて起つて浪立てば

甲鐵艦も木の葉とたゞよひ

大高じほの逆卷けば

村々流れて跡もなし

山は崩れ川は涸れ、
 國興亡し人變り、
 陸には古今の別あれど、
 海原のみは開闢の
 神代のすがたそのまゝに
 動き轟き寄せ返る。

一二 時の歴史

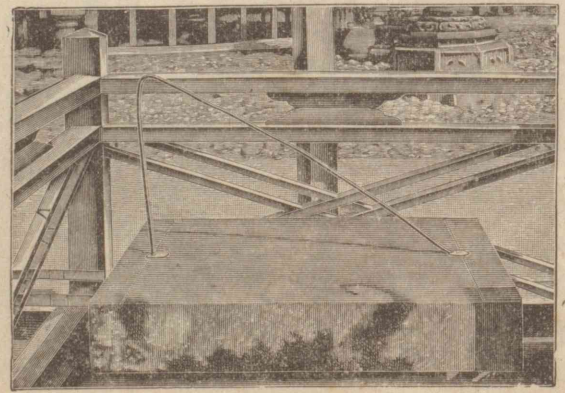
竹内時男

時の歴史は人間の歴史の如くに古い。世界がまだ若か

竹内時男
 數學者
 東京工業大學助
 教授

人間の祖先は日
 が動くに従つて
 物體の影の長さ
 と方向との變は
 るのを見て時刻
 を測る手掛を得
 た。

つた時、洞穴に棲む人間の祖先は、晝と夜との正しき循環を
 知り、そして日が動けば物體の影の長さや方向との變はる
 ことを知つて、始めて時刻を測る
 手掛を得たのであつた。
 彼等は他の部落に對して夜間
 に敵對行動を取らなければなら
 ぬことがあつた。その到着出發
 の時刻を定める爲めに、彼等は空
 を仰いで月を得た。「月がどうい
 ふ形になつた晩に、何處に集まら
 う。」彼等は斯う約束して其の目的を果たしたのである。

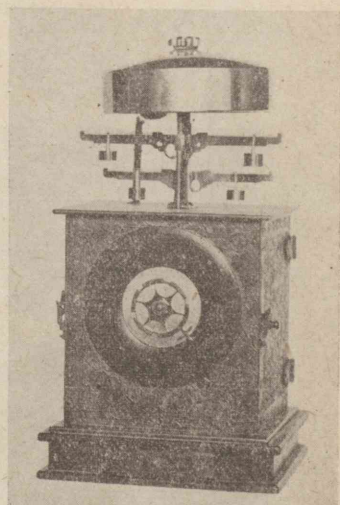


(社神釜鹽臺仙)計時日の平子林

彼等は歩哨の交代の時刻を定めるために、星を求め得た。

彼等はまた歩哨を立て、残りの者を休ませる必要を感じた。そして歩哨交代の時刻を定めるために、星を求め得た。歩哨を意味する英語の Watch は、古いアングロサクソン語から出たので、もとも目覚めて居るの義であつた。それが、轉じて懐中時計を意味するやうになつたのは面白い事である。

古代のカルデア人は、天體をバベル宮神として崇拜した。僧侶は星の運行を研究して、星學、占星術を世襲の學問とした。當時はまだ望遠鏡が發明されなかつたが、四季に依る



我國始めて出たマンイ時計 (徳川時代)

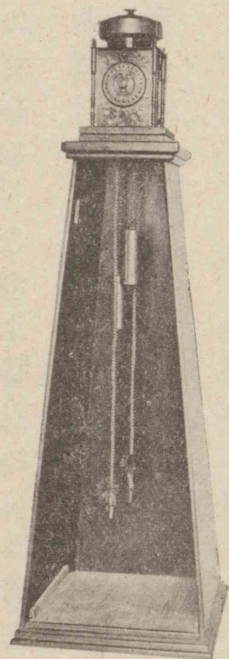
太陽の位置の變化を知り、また黄道に當て、十二の獸帯をも命名した。満月から満月までの日數を三十日に、晝夜を各、十二時間に、各時を六十分に、各分を六十秒に、一年を十二ヶ月、三百六十五日に分かつ事も、七日を一週とすることも皆此の時代に定まつたのである。

ユダヤ王アハズ

の有名な日時計は

紀元前七百年頃に

考案されたもので、



純國産の櫓時計 (徳川時代)

これが記録に残つてゐる最初の日時計である。

古代のバビロニア人やエジプト人は二千七百年前に水

古代のバビロニア人やエジプト

紀元前七百年頃に最初の日時計が考案された。

人は二千七百年前に水時計を用ゐた。

時計を用ゐた。これは水槽の底の小さい孔から落ちた水が他の器に入り、其の水準の高まるのを見て時刻を知るものである。この水時計は日時計と共に後に羅馬に傳はり、大理石の圓柱や記念像の立ち竝ぶ大羅馬の街頭に備へつけられたのである。凍る虞のあるのが水時計の缺點であるが、それでも十五世紀の頃までは伊太利や佛蘭西に用ゐられてゐた。

紀元前三世紀に砂時計が發明された。
アレクサンドリアエヂプト北部の港市

紀元前三世紀にアレクサンドリアに於いて發明されたものに砂時計といふのがある。古代アテナ人は之れを今の時計のやうに持ち歩いたといふ事である。

九世紀の頃イギリスのアルフレッド王が燭時計を造つた。

九世紀の頃、イギリスのアルフレッド王が燭時計を造り、

一日の中八時間を宗教の儀式に、八時間を公務に、残りの八時間を休養に當てたことは有名な事實である。燭時計といふのは、長さ一呎の蠟燭を六本備へ、その各々を正しく十二分して、その部分々々を黑白交互に塗つたもので、その三區分が一時間で燃えることになつてゐた。

一日の中八時間を宗教の儀式に、八時間を公務に、残りの八時間を休養に當てたことは有名な事實である。燭時計といふのは、長さ一呎の蠟燭を六本備へ、その各々を正しく十二分して、その部分々々を黑白交互に塗つたもので、その三區分が一時間で燃えることになつてゐた。

エスキモー人は長夜の光と熱とを取る爲めに燭時計を使つて居る。日本にも支那にも之れに類するものが用ゐられたことがあつた。

懷中時計の始まりはアメリカ發見の直ぐ後で、一千五百年頃であつた。ニューレムベルヒ市にペーテル、ヘンラインといふ機械工があつて、此の人がスプリングを用ゐる、重

懷中時計の始まりは一千五百年頃である。
ニューレムベルヒ市
ドイツのバウアリアの城市

い厚い時計の手細工を試みたが、それを種として懐中時計が工夫されたのである。

一千五百七十四年、東フランスの山間からチャールズ、クシンと云ふ一人の時計師が東を指してスイスに出て、そして湖水に沿うたゼネバ市に住んだ。彼れはそこに十三年間滞在した後、スイスの市民となつて此處にギルドを造つたが、それがスイス時計業の抑の濫觴である。

かくしてアルプスの雪の影の白きところ、そこに近代文化の命ともいふべき神聖な時計業が起つたのであつた。

スイス時計業の濫觴は一千五百八十七年である

芥川龍之介
中野試筆

一三 蜘蛛の絲

芥川龍之介

芥川龍之介
文學者 昭和二年
歿 年三十六
お釋迦様
釋迦牟尼佛
いらつしやい

或日のこととでございます。お釋迦様は、極樂の蓮池のふちをぶら／＼お歩きになつていらつしやいました。池の中に咲いてゐる蓮の花は、みんな玉のやうに眞白で、其の眞中にある金色の藥からは、何とも言へない好い香が、絶間なくあたりへ溢れて居りました。

極樂は丁度朝でございます。

やがてお釋迦様は其の池の縁にお佇みになつて、水の面を蔽うてゐる蓮の間から、ふと下の様子を御覽になりました。

ござります

蔽うて

をります。
見える

た。

此の極樂の蓮池の下は、丁度地獄の底に當つてをりますから、水晶のやうな水を透き徹して、三途の河や針の山の景色が、まるで覗眼鏡を見るやうにはつきりと見えるのでございませう。

すると、其の地獄の底に韃陀多と云ふ男が一人、外の罪人と一緒に蠢いてゐる姿がお眼に留りました。

この韃陀多といふ男は、人を殺したり、家に火をつけたり、いろ／＼の悪事を働いた大悪人でございませうが、それでもたつた一つ善い事をした覚えがございませう。と申しますのは、或時この男が深い林の中を通りますと、小さな蜘蛛が

覚え。

殺さう。

かう

釋(釈)

さうして

一匹路ばたを這つて行くのが見えました。そこで韃陀多は早速足を舉げて踏殺さうとしましたが、「いやいや、これ小さいながら命のあるものに違ひない。その命を無暗にとるといふ事は、いくら何でもかはいさうだ」と、かう急に思ひ返して、たうとう其の蜘蛛を殺さずに助けてやりました。お釋迦様は地獄の様子を御覽になりながら、此の韃陀多には蜘蛛を助けた事があるのをお思ひ出しになりました。さうしてそれだけの善い事をした報には、出来るなら此の男を地獄から救ひ出してやらうとお考へになりました。幸ひ側を御覽になりますと、翡翠のやうな色をした蓮の葉の上に、極樂の蜘蛛が一匹美しい銀色の絲をかけて居りま

絲(糸)

ました。

お釋迦様は其の蜘蛛の絲をそつとお手にお取りになりました。さうしてそれを玉のやうな白蓮の間から、遙か下にある地獄の底へ眞直にお下しなさいました。

こちらは地獄の底の血の池で、外の罪人と一緒に浮いたり沈んだりしてゐた韃陀多でございます。

聞える

何しろどちらを見ても眞暗で、たまに其のくら闇からぼんやり浮上つてゐるものがあると思ひますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、其の心細さと言つたらございません。其の上、あたりは墓の中のやうにしんと静まり返つて居て、たまに聞えるものといつては、た

緒諸

る

だ罪人が吐く微かな溜息ばかりでございます。

これは、此處へ落ちて來る程の人間は、もうさまぐな地獄の責苦に疲れ果てて、泣聲を出す力さへなくなつてゐるのでございました。ですから流石大悪人の韃陀多も、やはり血の池の血に咽びながら、まるで死にかゝつた蛙のやうに、唯もがいてばかり居りました。

ところが或時の事でございます。何氣なく韃陀多が頭を擧げて血の池の空を眺めますと、其のひつそりとした闇の中を、遠い遠い天の上から、銀色の蜘蛛の絲がまるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら、すると自分の上へ垂れて參るではございませんか。

蜘蛛の絲がまるで人目にかゝるのを恐れるやうに、一筋細く光りながら……

はひる 又、は
いる

韃陀多は之を見ると、思はず手を打つて喜びました。此の絲に縋りついて何處までも上つて行けば、きつと地獄からぬけ出せるのに相違ございません。いやうまく行くと極樂へはひる事さへも出来ませう。さうすれば針の山へ追上げられることもなくなれば、血の池に沈められることもある筈はございません。

一所(今は一生とも書く)
かういふ

かう思ひましたから、韃陀多は早速其の蜘蛛の絲を両手でしつかりと掴みながら、一所懸命に上へ上へとたぐりのぼり始めました。もとより大悪人のことですから、かういふ事には昔から慣れ切つて居るのでございます。併し地獄と極樂との間は何萬里となく隔つてゐるもの

繰繰

ですから、いくら焦燥あせつて見た所で容易に上へは出られません。やゝしばらくのぼる中に、たうとう韃陀多もくたびれて、もう一手繰も上の方へは手繰れなくなつてしまひました。そこで仕方がございせんから、まづ一休み休む積りて、絲の中途にぶら下りながら、遙かに目の下を見おろしました。

すると一所懸命にのぼつて來た甲斐があつて、さつきまで自分が居た血の池は、今ではもう何時の間にか闇の底に隠れて居りました。それから、あのぼんやり光つてゐた恐ろしい針の山も、足の下になつてしまひました。此の分でのぼつて行けば、地獄からぬけ出すのも存外譯がないかも

知れません。

韃陀多は両手を蜘蛛の絲にからみながら、此處へ來てから何年にも出した事のない聲で、「しめた、しめた。」と笑ひました。

ところが、ふと氣がつかますと、蜘蛛の絲の下の方には、數限りもない罪人たちが、自分ののぼつた後をつけて、まるで蟻の行列のやうに、やはり上へ上へと一心に攀ぢのぼつて來るではございませんか。

韃陀多は之を見ると、驚いたのと恐ろしいのとで、暫くは唯馬鹿のやうに大きな口を開いた儘眼ばかり動かして居りました。

まぜう

自分一人でさへ斷れさうな此の細い蜘蛛の絲が、どうしてあれだけの人數の重みに堪へる事が出來ませう。もし萬一途中で斷れたといたしたら、折角此處までのぼつて來た此の肝心な自分までも、もとの地獄へ眞逆様に落ちてしまはなければなりません。そんな事があつたら大變でございます。

が、さういふ中にも、罪人たちは何百となく、何千となく、まつ暗な血の池の底から、うよくくと這上つて、細く光つてゐる蜘蛛の絲を、一列になりながらせつせつとのぼつて參ります。今の中にどうかしなければ、絲は眞中から二つに斷れて落ちてしまふに違ひありません。

そこで犍陀多は大きな聲を出して、
 「こら、罪人ども、此の蜘蛛の絲は俺の物だぞ。お前たちは一體誰の許を受けてのぼつて來た。下りろ、下りろ。」
 と喚きました。

其の途端でございませう。今まで何ともなかつた蜘蛛の絲が、急に犍陀多のぶらさがつてゐる處から、ぶつりと音を立てて斷れました。ですから犍陀多もたまりません。あつと云ふ間もなく、風を切つて獨樂のやうにくるく廻りながら、見る見る中に闇の底へまつさかさまに落ちてしまひました。

風を切つて獨樂のやうにくるく廻りながら……

後には唯極樂の蜘蛛の絲が、きら／＼と細く光りながら、

月も星もない空の中途に短く垂れて居るばかりでございませう。

じつと(又ぢつと)

お釋迦様は極樂の蓮池のふちに立つて、この一部始終をじつと見ていらつしやいましたが、やがて犍陀多が血の池の底へ石のやうに沈んでしまひますと、悲しさうなお顔をなさりながら、又ぶら／＼とお歩きになり始めました。

自分ばかり地獄から抜け出さうとする犍陀多の無慈悲な心が、そして其の心相當な罰を受けて、もとの地獄へ落ちてしまつたのが、お釋迦様のお目から見ると、あさましく思召されたのでございませう。

『傀儡師』

一四 愛犬ポチ

長谷川 二葉亭

過去

長谷川二葉亭

明治の小説家

名は辰之助

名古屋の人

明治四十二年歿

年四十八

愛犬ポチ

宵の口から寐てしまふ。

大鋸で大丸太を挽き割るやうな音だ。

嬉しいにつけ、悲しいにつけ、憶ひだすのはポチの事だ。春雨のしとくと降る薄ら寒い或夜の事であつた。私は例の通り宵の口から寐てしまつたが、ふと目を覺ますと、耳元近くに妙な音がする。ゴウといふかとするれば、スウと、或は高く、或は低く、單調ながら拍子を取つて、さながら大鋸で丸太を挽き割るやうな音だ。私は夜中に滅多に目を覺ましたことがないから、初めはひどくびつくりしたが、能く研究して見ると、なに、父の鼾な

離子の手が込ん

手に取るやうに聞こえる。

ので、やつと安心して、其のまゝ再び眠らうとしたが、どうもそれが耳に附いて寐附かれない。仕方がないから、聞こえるまゝに其の音に聴き入つてゐると、何時からとなく離子の手が込んで来て、合の手に、遠くて微かにキヤン／＼といふやうな音が聞こえる。鼾が凄じい時には、それに氣壓されて聞こえぬが、鼾が低くなると判然と手に取るやうに聞こえる。不思議に思つて益々耳を澄ましてゐると、次第に大きく、高くなつて、遂には鼾とは離れ／＼に、確かに門前に聞こえる。

かうなつて見ると、疑ひもなく、小狗の啼聲だ。時々咽喉でも締められるやうに、けた／＼ましくキヤン／＼と啼き立

聲尻がやがてか
ぼそく悲しげに
なつて、めいる
やうに遠い／＼
處へ消えて行
く。

てる、其の聲尻がやがてかぼそく悲しげになつて、めいるやうに遠い／＼處へ消えて行く——かとすれば、忽ちまた近くで、堪へ切れぬやうに啼き出してクン／＼と鼻を鳴らすやうな時もあり、ギヤオと欠伸をするやうな時もある。

私はそつと夜着の中から首を出して、

「小さい狗の聲だねえ。 どうしたんだらう。」

と、うるさく母にきくと、母はやさしく、何處かの人が棄てた狗であらうと、一々説明してくれて、「もう晩いから、黙つてお寐。」とやさしく言つて、あちらを向いてしまつた。

私も亦夜着をかぶつた。 狗は門前を去つたのか、啼聲が稍遠くなるにつれて、父の躰が又うるさく耳に附く。 寐ら

ドサリと横にな
る。コロ／＼と
轉がる、ヨチヨ
チと這ひ寄る。
小さいから舌の
先でたあいもな
くコロ／＼と轉
がされる。

れぬ儘に、私は夜着の中で棄狗の有様を繰返し／＼考へた。 まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を生んだとする。 ちつぽけな、むく／＼したのが、重なり合つて首を擡げて乳房を探してゐる所へ、親犬が餘所から歸つて來て、其の側へドサリと横になり、片端から抱へ込んで舐めると、小さいから舌の先でたあいもなくコロ／＼と轉がされる。 轉がされては大騒ぎして起き返り、又ヨチ／＼と這ひ寄つて、ぼつちりと黒い鼻面でお腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當て、あわてゝ吸ひ付いて、小さな兩手で揉み立て／＼吸ひ出すと、甘い温かな乳汁が出て來て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて、何とも言へずおいしい。 と、腋の下からまだ乳首に有り

お腹がくちくなくなる。

ついうとくと
なると、含んだ
乳首が脱けさう
になる。



長谷川二葉亭

附かぬ兄弟が鼻面で割り込んで来る。取られまいとして、
産毛の生えた腕を突張り大騒ぎやつて見るが、到頭取られ
てしまひ、又其處らを尋ねて他の乳首に吸ひ付く。其のう
ちにお腹もくちくなり、
親の肌で體も温まつて、
溶けさうな好い心持に
なり、ついうとくと
なると、含んだ乳首が脱け
さうになる。夢心地に
もあわて、又吸ひ付いて、一しきり吸ひ立てるが、直に又た
あいなくうとくととなつて、乳首が遂に口を脱ける。脱け

一向正體がな
い。

忽ち暗闇から大
きな腕がヌツと
出て、正體なく
寐入つてゐる所
を無手と引つ、攔
み、宙に吊す。

雨に打たれて見
る間に濡れしよ
ばたれ、怖ろし
く寒くなる。

ても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正
體がない。其の時忽ち暗闇から大きな腕がヌツと出て、正
體なく寐入つてゐる所を無手と引つ攔み、宙に吊す。驚い
て目をポツチリ明き、いたいけな聲で悲鳴を揚げながら、四
足を張つてもがく中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗
になる。窮屈で息が塞りさうだから、出ようとするが出ら
れない。暫らくもがいて居る中に、ふと足搔が自由になる。
と、領元を撮まれて、高いく處からどさりと落された。う
ろくとして其處らを視廻すけれど、何だか變な淋しい眞
暗な處で、誰れも居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、
見る間に濡れしよばたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つ

よちくと這ひ出す。

して、クンくと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちくと這ひ出し、夜中を唯だひとり、温かな親の乳房を慕つて悲しげに啼き廻る、その聲が、さつき一度門前へ來て、又何處へかさまよつて行つたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞こえる。

うんざりする。

私はたまらなくなつて、母に頼んで、此の小狗に食物を與へて一晚泊めてやることにした。犬嫌ひの父は泊めた其の夜を啼き明かされると、うんざりしてしまつて、あくる日は是非逐ひ出すと言ひ出したから、私は小狗を抱いて逃げ廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐる。

だが、併しそれも一時の事で、其の中に小狗も獨寢に慣れて、夜も啼かなくなると、逐ひ出す筈の者に、何時しかポチといふ名まで附けて、姿が見えぬと、父までが一しよに捜すやうになつてしまつた。

犬好きは犬が知る。私のポチを愛する心はポチにも自然と通じてゐたらしい。

犬好きは犬が知る。私のポチを愛する心はポチにも自然と通じてゐたらしい。其の證據には、犬嫌ひの父が呼んでも、ほんの一寸お愛想に尻尾を掉るばかりで、振り向きもせずに行つてしまふ事がある。母が呼ぶと、不斷食事の世話になる人だから、又何か貰へるかと思つて、目を輝かして飛んで來るが、しかし唯だそれだけの事で、其の時のポチは矢張犬に違ひない。

その犬に違ひないポチが私に對ふと犬でなくなる。それとも私が人間でなくなるのか、どつちだかそれは分らんが、とにかく互の熱情熱愛に、人畜の差別を撥無して、渾然として一如となる。

一目散に飛んで来る。
細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とびつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだ

朝起きて縁側に出る。私の聲を聞きつけると、ポチは何處に居ても一目散に飛んで来る。急いで庭へ降りると、ポチが透かさず泥足で飛び付く。細い人參程の赤ちやけた尻尾を懸命に掉り立つて、嬉しさうに面を見上げる。見おろす。目と目とびつたりと合ふ。たまらなくなつて私が横抱きに引んだ。ポチは抱かれながら、身をもがいて大あばれに暴れ、私の手を舐め、胸を舐め、頤や頬までも舐める。

父が顔を擧めて、汚い〜といふ。成程考へて見れば、汚いやうではあるけれども、しかし私は嬉しい、止められない。どうして是れが止められるもんか。私が何も好い物を持つてゐるぢやないし、ポチもそれは承知でする事だ。利害の念を離れてゐるのだ。唯だ懐かしいといふ刹那の心になつて居るのだ。毎朝これでは着物がたまらないと、母はそれをこぼすけれど、着物なんぞの汚れを厭つてポチの此の志を無にする事は出来た話でない。

〔平 凡〕

一五 猫

夏 目 漱 石

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

夏目漱石
明治大正の小説家、英文學者。
名は金之助大正五年歿。年五十

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャー／＼泣いて居た事だけは記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあ



とで聞くと、それは書生といふ人間で一番癡悪な種族であつたさうだ。此の書生といふのは、時時我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。

然し其の當時は何といふ考もなかつたから、別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼れの掌たのめに載せられてスーと持ち

上げられた時、何だかフハ／＼した感じがあつたばかりである。掌たのめの上で少し落ち附いて書生の顔を見たが、所謂人間といふもの見始めてあらう。此の時妙なものだと思つた感じが今でも残つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顔が、つる／＼して丸で藥罐だ。其の後猫にも大分逢つたが、こんな片輪には一度も出會でした事がない。加之のみにち顔の眞中が餘りに突起して居る。さうして其の穴の中から時々ふう／＼と烟を吹く。どうも咽むせつぱくて實に弱つた。是れが人間の呑む煙草といふものである事は、漸く此頃知つた。

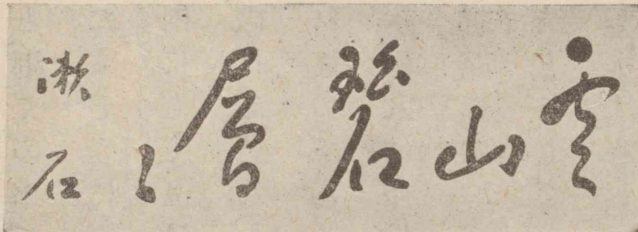
此の書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つ

たが、暫らくすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか、自分だけが動くのか、分らないが、無暗に眼が廻る、胸が悪くなる。到底助からないと思つて居ると、どきりと音がして眼から火が出た。それ迄は記憶して居るが、あとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が附いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其の上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。はてな、何でも容子が可笑しいと、のそく、這ひ出して見ると、非常に痛い。吾輩は藁の上から、急に笹原の中へ棄てられたのである。

ふと氣が附いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。

雲山碧層々
漱石



夏目漱石筆蹟

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと、向うに大きな池がある。

吾輩は池の前に坐つて、どうしたらよからうと考へて見た。別に是れといふ分別も出ない。暫らくして泣いたら書生が又迎へに来てくれるかと考へ附いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが、誰れも來ない。其の内池の上をさら／＼と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣きたくても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄歩かうと決心をして、そりそりと池を左に廻り始めた。どう

我慢して無理やりに這つて行く

も非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行く
と、漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つ
たらどうにかなると思つて、竹垣の崩れた穴から、とある邸
内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此の竹垣が
破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知
れんのである。一樹の陰とはよく云つたものだ。此の垣
根の穴は今日に至る迄、吾輩が隣家の三毛を訪問する時の
通路になつて居る。儲邸へは忍び込んだものの、是れから
先どうして善いか分らない。其の内に暗くなる、腹は減る、
寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末で、もう一刻も猶豫
が出来なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖か

もう一刻も猶豫が出来なくなつた。

こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。

運を天に任せる

さうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると、其の時
は既に家の内に這入つてたのだ。こゝで吾輩は彼の書生
以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第
一に逢つたのがおさんである。是れは前の書生より一層
亂暴な方で、吾輩を見るや否や、いきなり頸筋をつかんで表
へ抛り出した。いや是れは駄目だと思つたから、眼をねぶ
つて、運を天に任せて居た。然しひもじいのと寒いのは、
どうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て
臺所へ這ひ上がった。すると間もなく又投げ出された。
吾輩は投げ出されては這ひ上がり、這ひ上がつては投げ出
され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。

其の時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此の間おさんの三馬を偷ぬすんで此の返報をしてやつてから、やつと胸の痞つかひが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとした時に、此の家の主人が騒々しい、何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて、此の宿なしの小猫がいくら出してても出してもお臺所へ上がつて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黒い毛を撚ひねりながら、吾輩の顔を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ、奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を利かぬ人と見えた。下女は口惜くわしさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此の家を自分の住

家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合はせる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり、殆んど出て來る事がない。家のものは大變な勉強家だと思つて居る。當人も勉強家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ様な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼れの書齋を覗いて見るが、彼れはよく晝寢をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎よだめをたらして居る。彼れは胃弱で、皮膚の色が淡黄色を帯びて、彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其の癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを

其の癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろける。

彼れは友達が來る度に、何とかかんとか不平を鳴らして居る。

飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是れが彼れの毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら、教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はないと。それでも主人に云はせると、教師ほどつらいものはないさうで、彼れは友達が來る度に、何とかか不平を鳴らして居る。

吾輩が此の家に住み込んだ當時は、主人以外の者には甚だ不人望であつた。どこへ行つても撥ね附けられて、相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、

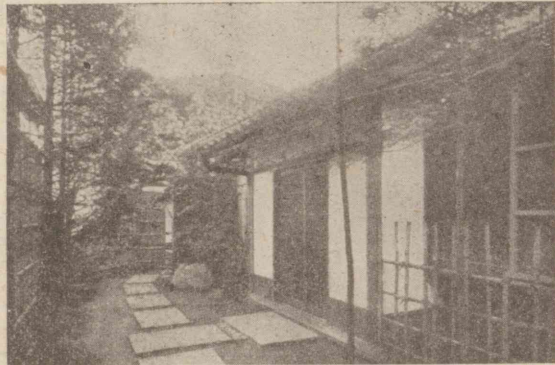
今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を讀むときは、必ず彼れの膝の上に乗る。彼れが晝寢をするときは、必ず其の背中に乗る。是れはあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから己むを得るのである。其の後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側へ寢る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つて、このうちの子供の寢床へもぐり込んで、一所にねる事である。此の子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床に入つて一間へ寢る。吾輩はいつて

も彼等の中間ちゆうかんに己れを容るべき餘地を見出だして、どうかかうにか割り込むのであるが、運悪く子供の一人が眼を醒ますが最後、大變な事になる。子供は——殊に小さい方が質がわるい——猫が来た——といつて、夜中でも何でも、大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は、必ず眼をさまして、次ぎの部屋から飛び出してくる。現に先達てなどは、物差で尻へたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない様になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては、言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、

言語道斷

抛り出したり、へツつひの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら、家内總がかり



猫執筆當時の筆者之家

で追ひ廻して迫害を加へる。此の間も一寸疊で爪を磨いだら、細君が非常に怒つて、それから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君などは、逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らる。白

君は先日玉の様な子猫を四疋産まれたのである。所がそ

吾輩の尊敬する
筋向うの白君

一部始終を話し

この家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて來たさうだ。白君は涙を流して、其の一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして、美しい家族的生活をするには、人間と戦つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤もの議論と思ふ。又隣の三毛君などは、人間が所有權といふ事を解して居ないといつて、大いに憤慨して居る。元來我々同族間では、目刺の頭でも、縮の臍でも、一番先に見附けた者が之れを食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此の規約を守らなければ、腕力に訴へてもよい位のものだ。然るに彼等人間は、毫も此の觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は、

我々同族間では、目刺の頭でも、縮の臍でも

腕力に訴へる

寧ろ樂天である。

必ず彼等の爲めに掠奪せらるゝのである。彼等は其の強力を頼んで、正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると、兩君よりも寧ろ樂天である。唯だ其の日くが何うにか斯うにか送られ、ばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く、猫の時節を待つがよからう。

『吾輩は猫である』

黒猫の留守を覗くや田植時

許 六

春雨や猫に踊を教へる子

一 茶

霧を吹くやうに逃げゆく負けた猫

川 柳

大語文

小林一茶

俳人 長野縣上水内郡柏原村の人文政十年(三〇八七)歿年六十五
妙專寺 一茶の菩提寺、信越線柏原驛から半キロ許。

飯繩

長野縣の山、標高一九一七米
妙高、黒姫と南北一列に相並んで柏原村の南西方に聳えてゐる。

一六子 供

小林 一茶

妙專寺のあこ法師鷹丸とて、今年十一になりけるが、三月七日の空うらくと霞めるに愛でて、觀了といふ太く逞しき荒法師を供して、荒井坂といふ所にまかりて、芹薺などつみて遊ぶ。折から飯繩イハヒおろしの雪解水黒けぶり立て、うだうと鳴りわたりて、おし來りしに、いかゞしたりけん、橋をふみはづして、だぶりと落ちたり。觀了たのむくと呼ばはりて、こゝに頭いづると見れば、かしこに手を出しつゝ、忽ちその聲も蚊の鳴くやうに遠ざかると見るを、この世の

名殘として、いたましいかな、逆卷く波にまき込まれて、影も容も見えざりけり。あはやと村の人々打群りて炬をかゝげてあちこち捜しけるに、一里ばかり川下の岩にはさまりてありけるを、とり上げて、さまぐ介抱しけるに、むなしき袂より露の臺三つ四つこぼれ出でたるを見るにつけても、いつもの如く、いそぐ歸りて家内へのみやげの料にとりしものならんと思ひやられて、鬼をひしぐ山人も皆々袖をぞ絞りける。とみに駕にのせて初夜過ぐる頃寺にかき入れぬ。ちゝ母は今や遅しとかけ寄りて、一目見るよりよよと人目も耻ぢず、大聲に泣きころびぬ。且には笑ひはやして門出したるを、夕には物いはぬ屍となりてもどる。

且一且

萌え。

目もあてられぬ有様にぞありける。九日野邊送なれば、おのれも棺の供につらなりぬ。

思ひきや下萌いそぐ若草を

野邊のけぶりになして見んとは

「親のない子はどこでも知れる、爪をくはへて門に立つ」と、子供等に唄はるゝも心細く、大方の人交りもせずして、裏の畠に、木萱など積みたる片陰にせぐくまりて、永の日を暮しぬ。（ま）わが身ながらも哀なりけり。

我と來て遊べや親のない雀

六歳彌太郎

彌太郎
一茶の幼名

大和國
奈良縣

昔大和國立田村にむくつけき女ありて、まゝ子の咽を十日程ほしてより、飯を一碗見せびらかして、言ふやう「これをあの石地藏の食べたらんには、汝にとらせん」とあるに、まゝ子はひだるさ堪へがたく、石佛の袖にすがりて、しかく願ひけるに、不思議やな、石佛大口明けて、むし〜喰ひ給ふに、さすがのまゝ母の角もぼつきり折れて、それより我が生める子と隔てなく育みけりとなん。その地藏ぼさち今にありて折々の供物絶えざりけり。

こぞの夏、竹植うる日の頃、うき節繁きうき世に生れたる娘、さとかれとて名をさと呼ぶ。ことし誕生日祝ふころ

植（ま）うき節繁（ま）きうき世。

ぼさち
菩薩

衣の裏の玉
けらい

を打ちたゝきて、にこ／＼笑ひ顔を作るに、母は長々胎内の
苦しきも、日々襦袢の穢らしきもほと／＼忘れて、衣の裏の
玉を得たるやうに撫でさすりて、ひとしほ喜ぶ有様なりけ
らし。

蚤のあとかぞへながらに添乳哉
より／＼思ひ寄せたる小兒をも遊び連にもと、こゝに集
めぬ。

柳からも／＼んぐあゝあと出る子哉
蓬萊になんむ／＼といふ子かな
年間へば片手出す子や更衣
たのもしやてんつるてんの初給

名月を取つてくれろと泣く子哉
子寶がきやら／＼笑ふ榾火かな
あこが餅あこが餅とて並べけり
餅花の木蔭にてうちあは／＼かな
涼風の吹く木へ縛る我が子かな
わんぱくや縛られながら呼ぶ螢

「おらが春」

一七 郷里なる愛兒に

度々手紙をくれてうれしい。お前方が發つてから、家の
中はピンカラリン、まるで大風の吹いたあとの様で、鼠に引

お前方が發つて
から、家の中は
ピンカラリン、
まるで大風の吹
いた後の様で、

鼠に引かれさうな淋しい日を送つてゐる。

かれさうな淋しい日を送つてゐる。あの子坊主(お前の事)を淋しい時だけ傍そばにおいて、やかましくて困る時に、電気仕掛で國へ送つてやれたら、よからうなど云つては、生きた人間が、まさかさうもなるまいなんて、馬鹿話をする事も度々ある。

親類まはりや、山登りや、温泉あるきや、水泳ぎや、魚釣りで大分忙しい様子。結構だ。好い空気を吸つて、うんと遊んで、是れから一年の間勉強する元気を養つて来るがよい。但し、其の間にも、朝一二時間の讀書、數學其の他のお稽古、これは是非ともやらねばなりませんぞ。

お墓参りに行つたら、よく御寺の様子を見て来て、歸つて

上杉謙信

戦國時代の名将

天正六年卒

年四十九

上杉鷹山

米澤の名君

名は治靈

文政五年卒

年七十二

から報告なさい。先祖様のお墓、お祖父様、お祖母様の御墓には、取りわけ立派に御辭儀をしていらつしやい。それから謙信公の上杉神社、鷹山公の松岬神社へも是非参詣して、尚ほ、お婆様達から謙信公、鷹山公のお話をよく伺つていらつしやい。それから若し暇があつたら、御廟山に参詣して、上杉家の御廟所の左手の前に、今から百數十年前の御祖父様——鷹山公に御奉公して家の先祖様達の中で一番立身したお方——の獻納なすつた石の燈籠が立つて居り、それに其の御祖父様の名と獻納なすつた年月とが刻んである、それを見て我が家は藩の中でも卑しい家柄ではなかつた、吾々も先祖様達の御顔をよごしてはならぬといふ事をよく考

達者で歸つて來るんだぞ、よいか、病氣をせず、怪我をせずに、家に歸つて、二の間の蚊帳の中へお母様達と一しよに休んで、そして井戸に冷したサイダーを飲むんだぞ。

へていらつしやい。

もう明日は八月だ。もう二週間ばかりでお前に逢へると思ふと、中旬が待遠しくてならぬ。達者で歸つて來るんだぞ。よいか、病氣をせずに、怪我をせずに、家に歸つて、二の間の蚊帳の中へお母様達と一しよに休んで、そして井戸に冷したサイダーを飲むんだぞ。

このごろ退屈まぎれに、こんな歌のやうなものを作つた。「者はづくし」といふのだ。

お前が居なくて、淋しい〜といふ者は誰れ。……お母様〜。

坊ッちゃん居ないで、退屈だ〜といふ者は誰れ。……

…空氣銃〜。

坊ッちゃん居ないで、安泰だ〜といふ者は誰れ。……

…雀と蟬〜。

坊ッちゃん居ないで、つまらない、死んぢまへといふ

者は誰れ。……金魚〜。

どうだ、面白いだらう。

あとは明日。左様なら〜。

〔水 菴〕

一八 狭霧の穂高

七月二十七日になつた。

麓一帶の森林が
淡い霧のヴェー
ルに包まれて、
短い眞夏の夜
の眠りから醒め
て来る。

上高地の夜は穂高の峰から明け初める。曉の星の光が薄らいて朝日が昇るころ、穂高の峰が紅玉のやうに、薔薇のやうに、透徹に朝の空気を透して美しく現はれ出ると、やがて麓一帶の森林が、淡い霧のヴェールに包まれて、短い眞夏の夜の眠りから醒めて来る。霧の底には梓川が昨日に變はらず涔々と流れて居る。吾等は川原に出て顔を洗つた時に、しみぐ「生まれて始めての朝だ」といふ心持がした。今日はいよゝあ、あの美しい、雄々しい穂高の峰を窮めるのである。吾等は六時半頃宿の若者を案内に立て、踴躍して出發した。

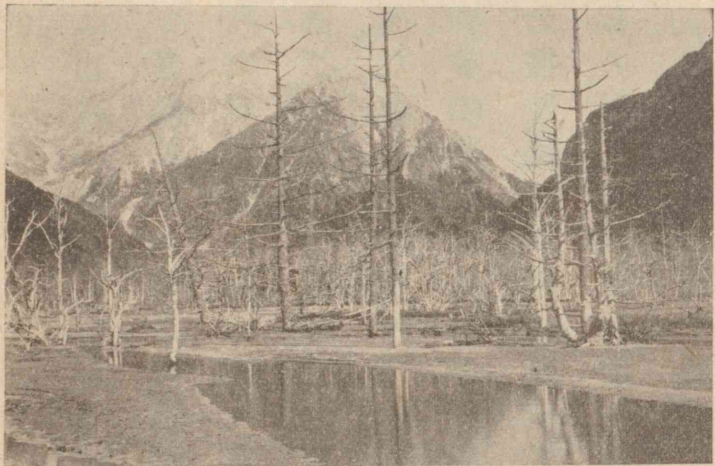
河童橋を渡ると、道は直ぐに森林に入る。草にはしつと

りと露がおいて、歩きたびにハラ／＼と着物にかゝる。吾

等は熊笹の茂みをかき分けて、水を涉り谷を越えて、それから暗い森林に入った。

美しい處女林だ。此の頃は上高地も處さらはず伐採されて、無情な人間の征服に任せてあるけれども、その森の中に、白樺や、榆などが若々しい葉をつけて、靜かに呼吸して居るのを見た時は、實に外で見られぬ景

處女林



上高地よ見たり穂高

クイーン、ホダカ
の濃艶な深緑
のスカートは其
處に盡きてや
がて、なだらか
な石の河原に出
た。

天鷲絨のやうな
上高地谿谷の森
林の中には、梓
川が絹絲のやう
に、銀のやうに
光つてゐる。

色だと思つた。クイーン、ホダカの濃艶な深緑のスカートは其處に盡きて、やがてなだらかな石の河原に出た。其處はもう宿から一里程來た處である。見上ぐれば穂高の前山は巨人の様に聳えて、急な傾斜は人間の犯す事を許さぬやうに、麓まで鋭い直線をなしてゐる。天鷲絨のやうな上高地谿谷の森林の中には、梓川が絹絲のやうに、銀のやうに光つてゐる。遠い乗鞍の連山は青い柔らかな曲線を描き、残雪が白く輝いて、近くは焼岳の中腹から噴煙がゆる／＼と立ち昇つてゐる。

吾等は積の石を渡つて、もう一度樺や樺の生ひ茂つた森の中を右の方へと曲つて、再び急斜面に出た。岩角の高山植物の赤い花や、黄色い花の美しく咲いた中を分けて、段々險しくなる岩層を攀ぢ登ると、大きな雪溪があつた。その谷の裂目に深さ二間もある残雪が何百尺となく續いて、雪の上を吹いて來る風は、氷の様に冷たく旅人の袖を拂ふ。吾等は雪解の水に喉を濕して、氷斧をそこに置いたまゝ、雪溪に沿うた岩山を登つて行つた。岩の合間々々にはイハカガミ、キバナノコマノツメ、キンバイ草等の高山植物が、夏を誇るやうに咲いてゐる。汗ばんだ肌を冷たい風に吹かせながら、深山の奥の御花畑を分け行く心地は、實に何とも云はれない。

登れば登るほど勾配が急になるので、岩の上を這ふやう

にして頂上近くまで行くと、今迄晴れてゐた空が何時の間にか灰色に曇つて居る。吾等は空を氣にし足許を氣にしつゝ、幾個所かの難所を無事に通つて、やがて荒涼たる絶頂に立つた。

時は十時十五分である。案の如く、狭霧は海のやうに徂徠して何物も見えない。私は風雨に朽ちた三角點の櫓の上に立ち、友と相顧みて、始めて日本アルプスといふ山の氣分に觸れることが出來た。

待てどもくく霧は晴れようともせずして、後からくくと麓から押し寄せて來る。併し其の晴間に見た笠ヶ嶽の雄大さは、言語に絶してゐた。それから奥穂高の肩には雪が

晴間に見た笠ヶ嶽の雄大さは言語に絶してゐた。

べたくく一面についてゐて、實に莊嚴を極めたものであつた。

あゝ雄大なる穂高の峰よ。海を抜くこと正に一萬〇三百餘尺、神風頻りに袖を拂つて、霧は面に冷たく、空も山も濛濛として薄暗く、而して峰頭には、唯だ、三個の人影があるのみである。

霧の晴れるのを待つ間に、案内者はいろくくの話をしてくれた。われらは上高地の有名な老獵師で、日本の登山者仲間知らぬ者なき嘉門治を始めとして、數十人の者が、この三角點の花崗岩の二十八貫からあるのをかつぎ上げたことを聞いて、當時に於ける陸地測量部の苦心を思つた。

さうして、一葉の地圖も實に貴重なものであることを知つた。

一時間も待つたけれども、霧の晴れる望みがない。世界が全く、霧の海となつて、刻々にそれが深まつて行くばかりである。展望の望みは絶えた。われらは何時か再び此の山頂を訪ふべく決心して、やがて下山の途に就いた。

たち向ふ穂高が嶽に夕日さし湧きのぼる
雲はいゆきかへらふ

若山牧水

一九 乃木大將の幼時

横山 健堂

横山健堂
名は達三
評論家
山口縣の人
明治五年生
長府
山口縣豊浦郡
在：有

乃木大將の家は、長府の字横枕といへる處に在り。家は僅に六疊と二疊半と三疊との三つの座敷を有するのみ、粗樸にして狹隘なりきといふの外、何等言ふべきものあることなし。此の如き陋屋に住して、家族は殆ど着のみ着の儘ともいふべき有様なりしかど、武具ばかりは物々しく飾りつけられたりき。大將は實にその間に於て父の教育を受けたりしなり。

大將の父希次翁は武士的精神に富めるのみならず、武藝に達し、故實に通じたる武邊者なりき。嘗て、京都の三十三

邊(辺)
嘗(嘗)

三十三間堂
京都市下京區に
ある、堂の長さ
一一〇米強、京
都蓮華王院の通
稱。

間堂に到りて通し矢を試み、成功せし事ありと傳へらる。また極めてスパルタ風の人なり。その屋敷は約三百坪あり。家は小さく、空地を廣くして、父子共に武を練る處としたり。

翁は嘗て、人間の根氣と體力との耐久の限度を試験せんと思ひ立ち、其の屋敷の内を、晝夜兼行して徒歩し、五日目の夜に至りて疲勞して倒れたれども、なほ能く談話し、且つ用を辨ずるを得たりき。こゝを以て、翁は君命ならば何時にても五晝夜までは、晝夜兼行の任務に服するを得べき自信を確め得たりといふ。

翁は又體力の訓練の爲に、野宿を試みし事あり。蒼天の

辨(弁)

下に、麥畑に露臥し、以て自ら心身の健否を驗し、而して精神だに剛健ならば、能く純然たる野營にも堪へ得べきことを確めたり。

嚴冬の一日、大將が「寒い〜」と言へるに、翁は「寒ければ暖くして遣るべし。」とて、大將の衣を剥ぎて裸體とし、井水を汲み來りて其の頭上より浴びせかくること三桶に及びたり。この後、大將は如何に寒き日も、嘗て「寒い」の一語を口に發せざるに至れり。

大將が日清、日露兩役に當り、遂に寒いと言ひし事なく、老軀を以て將帥の大任に服し、一兵卒と同量の燃料を以て滿洲の寒氣に打勝ちしは、全軍の驚歎せし所に非ずや。大將

率^〇ゐる

齊^一齋

が一冬、學習院學生を率ゐて、大演習を陪觀せし時も、旅舎に就きながら蒲團を被らず、たゞ外套一枚を以て、ごろりと疊の上に寝て熟睡し、少しも元氣を損ずることなかりしは、教授學生をして齊しく感動せしめたる所に非ずや。

大將の此の如き勇氣は、蓋し少年時代の教育より得たりしなり。大將は維新前に於ける大武邊者の典型を、今日の文明時代に最も崇高に發揮したるなり。武士の覺悟は、老少を問はず、平時に於て、常に戰時に於ける訓練と修養とを怠らざるに在り。一言以て之を蔽へば、武士の本領は、終生緊張したる武士的精神を確保して、須臾も之に離れざるに在り。此の如くするは武士道教育の第一則なり。而して

たらずんばあらず

矢島鐘^二

教育家 郡馬縣
の人 明治十六
年生

大正十年九月、
庭球デヴィス・カ
ップ戦に於ける
清水善造と米國
選手チルデンと
の試合。

漂^〇うて

選…撰

大將の如きは、この教育の効果を理想的に體現したる大人物たらずんばあらず。
〔乃木大將〕

二〇 美しき球

矢 島 鐘 二

戰の幕は切つて落されました。こゝ紐育を距る二十哩、理想的運動場として名あるフォレストヒルの清らかなグラウンドの上には、白線が美しく浮いて、何となく純化されさうな気分が漂うてゐました。老幼男女を問はず、世界各國の人々が、^{スラッシュ}鯨詰のやうにひし〜とグラウンドの周圍に寄り重なつて、兩選手の出場を今か〜と待ち構へてゐま

映え。

した。チルデン君の上に幸福あれと祈る人の心と、清水君の上に光榮あれと祈る人の心とが平和な光の中に照り映えてゐました。

衷哀

此の光の中に、此の無聲の應援の中に、凜乎たる決意と慘澹たる苦衷クワナウとを想はせながら、二君は微笑を浮べてテニスコートに現れました。チルデン君は身長六尺二寸、清水君は五尺四寸五分、まるで大人に子供が立向つたやうでありました。觀覽席で、「氣の毒だが、清水君は駄目だらう。」と囁くのが、清水君の耳にも聞えました。

火蓋を切る。
龍虎の争。
五(牙)え。

愈、火蓋は切られました。隙を窺ひ虚を衝く龍虎の争が始まりました。秒一秒、チルデン君と清水君との球は五(牙)え

正序
逆序
逆序
逆序

て來ました。觀覽者は、球の動くがまゝに、その瞳ヒトメを忙しさに動かしてゐました。その瞳に、いたはしや片足踏み込らしたチルデン君の取亂した姿が映りました。米國人は驚倒しました、躍起となりました。此の時です、清水君がチルデン君の血走つた目先に、取亂した足許に、柔かい緩い球を送つてやりましたのは、この瞬間。

「ミスター、シミヅ！」

といふ歡呼の聲と共に、米國人三萬の手が林のやうに一齊に振上げられました。あゝ、この一事、清水君も清水君ですが、米國人もさすがに米國人であると思ひました。

初めコートに出た時、チルデン君の眉宇ヒトクの間には、清水君

報^レいる

深切(親切)

に對する侮蔑の情があり／＼と浮んでゐましたので、心ある米國人は、少からずひや／＼してゐたやうでありました。ところが、清水君は、この冷たい侮蔑に報いるに、溫情春のやうな球を以てしたのでありますから、その深切は電氣のやうに米國人の胸にも響いて、感激が心の底から涌き上つたことでありませう。勿論、應援に來場してゐた日本人は、盛んに歡呼しました。

この敵味方總掛りの歡呼は、清水君の單なる妙技に對して發したのではなくして、その精神に對する力強い感激から發動したのであります。時は一點一分を争ふ時でありました。五月、六月、七月、八月の四箇月に互り、十二箇國の選

勝を制す

デヴィス・カップ

富豪デヴィスが
庭球獎勵の爲に
寄贈せる。カップ。
世界各國の選手
によつて競技を
行ふ際に贈る庭
球界最高の優勝
カップ。
汝は汝にして汝
にあらず。

手を薙ぎ倒して、最後の決勝に入つた時でありました。若し今明二日間の米國選手との競技に於て勝を制したなら、日本開闢以來のデヴィス・カップを獲得することの出来る時でありました。この貴重なる時に於て、チルデン君の窮地を見て、溫情のこもつた球を送つた清水君は、實に偉いと思ひます。しかも清水君が所謂「汝は汝にして汝にあらず。」で、日本を背負つて立つてゐる時であります。この時に於て、神州男兒の意氣を各國人の面前に如實に發揮したことは、實に敬服の外はありません。清水君のこの貴く美しい精神は、長へにその光彩を放つことでありませう。

『スポーツマンの精神』

二 形見の萬年筆

池田 宣政

池田宣政

少年讀物作者

元東京市牛込區

余丁町小學校訓

導

トーマスクック

會社

ロンドンに本店

を有し、世界各

國旅行者のため

に便利を計る會

社

ヨーロッパの大都會を、短い時日の間に見物するに一番
便利なのは、トーマスクック會社の見物乗合自動車を利用
する事である。無蓋の四十人乗の大型自動車で、案内者が
一人附いてゐる。非常な速力で市内の名所から名所を走
り回つて、案内者が英語、獨語、佛語で説明してくれるのであ
る。

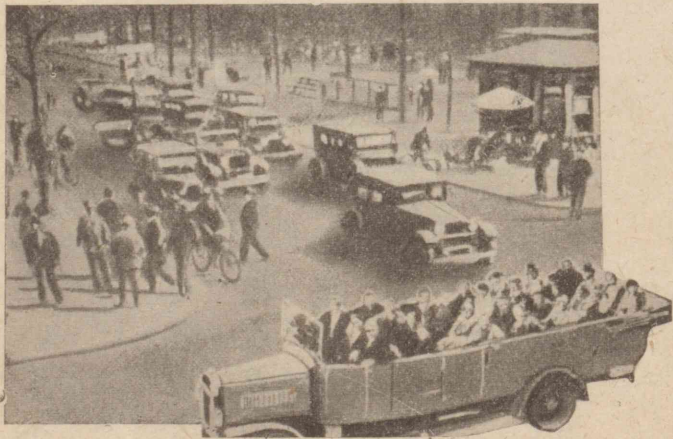
ベルリンに着いた翌日、私はこの自動車の一席を占めて、
各國の見物人と一緒に市中を見物したのであつた。

ベルリン
獨逸の首都

ウンテル・デン・
リンデン
ベルリンの中央
公園附近の大道
路
リンデン
菩提樹

車がウンテル・デン・リンデンの大街路に止つて、案内者が
説明してゐた時の事である。

リンデンの木蔭に遊んでゐた
ドイツの少年達は、外國人珍し
さに自動車の周圍に駆けよつ
て來た。大戦後の事として、少年
達の服装は見苦しかつたが、そ
の顔には男らしい負けじ魂が
現はれてゐた。淺黒い陽に焼
けた顔色、人の心を刺通すやう
な鋭い瞳ヒトミきつと結んだ唇クハゼ、さすがはドイツの少年だなど、私



街ンデンリ・ンデ・ルテンウ

は彼等の様子に見惚れてゐた。

すると、その中の十二三歳の一少年が私に近づいて来て、
「どうぞ、日本の御方。」

と言ひながら、小さな手帖を差出した。これまで各地を旅行する間に、少年達から署名を求められたことは度々あつたので、私はその手帖を受け取つて、自分の万年筆で、

「池田宣政、日本、東京」

とわざと日本字で認めてやつた。

すると、横あひから、フランスの若い男が、

「私も書きませう。」

と言つて、笑ひながら、その手帖と私の万年筆を取つて署名した。

「私どもも書きませう。」

と、カナダから来た老夫婦も署名した。かうしてきたない手帖と私の万年筆は、乗合の笑聲の中に、彼方此方と人々の中を渡つていつた。私は、私の万年筆が諸外國人に使はれるのを何となく嬉しく感じてゐた。といふのは、此の万年筆は外遊の途に上るに當つて、親しい友が心を籠めて贈つてくれたもので、材料といひ、細工といひ、裝飾といひ、又その使ひ心地といひ、實に申分なく出来た日本品であつたからである。

ふと氣がつくと、自動車は何時の間にか走り出してゐた。

ハツと思つて振りかへつて見ると彼の少年はもう五十間ばかり後ろで、大聲に何か叫びながら、兩手を高く舉げて振つてゐる。其の手に見える白いものは手帖であらう。けれども万年筆はどうしたのか。その行方を尋ねるのも失禮の至りと思つて、その儘にしてしまつた。斯うして愛用の万年筆は失はれた。

それから三年は過ぎ去つた。日本に歸つてからの或日、私はつひぞ知らぬ外國婦人から、手紙と共に一封の小包郵便を受取つた。不思議に思つて、小包を開くと、中から、丁寧に紙に包んだ万年筆が現はれた。「おや」と夢かとはばかり喜んだが、併し、鞘は原形のないまでに破れ、ペンは歪んで、満足

愛兒が大怪我をして歸つて來たやうに驚き、且つ失望した。

な字も書けさうになかつた。私は愛兒が大怪我をして歸つて來たやうに驚き、且つ失望した。

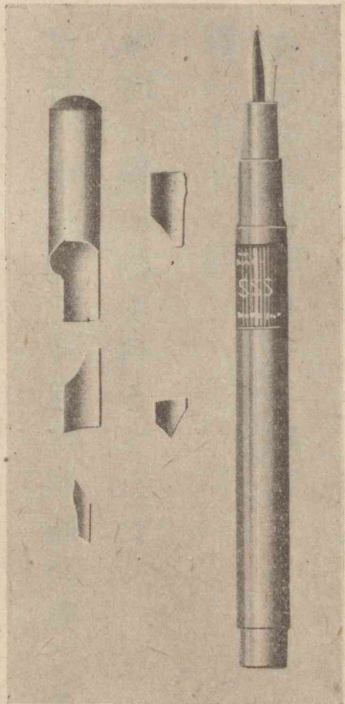
失望しながらも、ともかくもと手紙の封を切つて見た。ドイツ文字で細かく書いた長々しい手紙であつたが、讀んで行く中に、覺えず私は眼瞼の熱くなるのを感じた。ひとりてに涙が頬を傳うて來た。

翻(訳)
譯(訳)

文意をわかりやすく翻譯すると、かうであつた。

見も知らぬ私から、突然手紙を差上げて御不審にお思ひでせう。又こんな下手な分りにくい文字で、さぞ御迷惑でせう。けれども、私は最愛の息子が此の世の息を引

取る間際まで、氣に掛けてゐたあなたの万年筆について、是非申し上げねばなりません。



(藏所者筆) 筆年萬の見形

私は、あなたが三年前に、ウンテル・デ・ンリンデンの木蔭で、万年筆を貸して下さったカールと申す少年の母親で

す。

カールは死にました。そして死ぬ時まであなたの万年筆の事を心配してゐました。いゝえ、その万年筆の爲

に死んだやうなものです。

カールは私の季の息子でした。兄達は、一人はイギリスに、一人はオーストリアに働いてゐます。父親は大戦中、お國の爲にフランス國境で戦死を遂げましたので、母子二人で貧しく暮らしてゐました。

カールは良い子供でした。親切で孝行な子でした。學問も好きでした。私は、どんなにあの子の行く末を樂しみにしてゐた事でせう。そのカールは死にました。ああ、最愛のカールは、あなたの万年筆をお返ししようと瘦せるほど苦心して居ました。そして三年後の今日、漸くあなたの住所を知る事が出来たので、お返ししよう。

と、外へ出た時、自動車に轢かれてしまつたのです。けれども、カールは死の瞬間まで、本當のドイツ人らしく、正直で、立派でした。

カールは、あなたから萬年筆を借り放しにした事を非常に残念がつてゐました。あなたの自動車が急に走り出した時に、喫驚して後を追つたさうです。けれども間に合ひませんでした。

家に歸つて、カールはその事ばかり心配してゐました。「ドイツの少年は不正直だ。他人の物を横領したと、日本人に思はれるのは、死ぬよりも恥辱だ。否、僕だけの恥ぢやない。ドイツ少年全體の恥だ。私はどうしてもあの

日本人に、これを返さなければならぬ」と言つて、毎日街へ出て、あなたに再び遇はうとしてゐました。

容易にあなたに遇へませんでした。あなたの署名は日本字であつて、私共には讀めませんので、カールは街を通る日本人に讀んでもらひました。その日本人は手帖を見て、「唯、日本、東京だけでは住所は分らない、大使館で尋ねたらわかるかも知れない」と教へましたのでカールは大使館を訪ねましたが、それもだめでした。

大使館から歸つて來たカールは、「あの池田といふ日本人は、僕の事を何と言つてゐるだらう。いゝや、ドイツの事をどんなに悪く思つてゐるだらう」と言つて、口惜し涙

館(館)

を流してゐました。あの子の性質としては無理もないと、私も一緒になつて残念がりました。あなたの住所を調べ出す手段には、私もカールも全く困つてしまひました。所がどうでせう。カールはたうとうあなたの住所を探し出したのです。

或日、カールは、狂犬のやうにすさまじい勢で家へ飛込んで來ました。そして、

「お母さん、わかりました、わかりました。」

と言つて泣いて喜びました。カールが熱心にあなたの住所を探してゐることは、學校でも、教會でもお友達の間でも大評判で、親切な人達は一緒になつて探してゐてく

狂犬のやうにす
さまじい勢で家
へ飛込んで來ま
した。

譽(誉)

れました。中でも一番熱心なヨハンといふお友達が、「ドイツ少年の名譽の爲に一緒に探す」と言つてゐましたが、此の少年がたうとうあなたの住所を「海外の友協會」の名簿中に発見したのでした。

早速、私達は萬年筆の小包を造りました。そしてカールは、ヨハンと一緒に小包を抱へて元氣に家を飛出して行きました。私は微笑を以てその後を見送りましたが、二人が戸口を出たかと思ふ時に、ビューと不吉な警笛が鳴りました。

暫くすると、どさくと階段を上る人々の重い足音がして、荒々しく戸を開いて二三人の大男が入つて來まし

ついでに
鬼のやうに快活
だったカールな
のでした。

た。私は一目見てあつと後ろへ倒れました。
人々に頭と足を支へられて、擔ぎ上げられて來たのは、
つい二三分前に喜び勇んで、鬼のやうに快活だったカー
ルなのでした。喜びの餘りに向ふ見ずに街に飛出した
出會ひ頭に、自動車に轢かれたのでした。

私は、床の上におろされたカールの身體に取りすがり
ました。青白い顔、眞紅な血。醫者の手當のかひもなく、
カールは刻々白蠟ハクワツのやうに青ざめて行きました。

「すみません、お母さん、ゆるして下さい。」

さう言つて、目を閉ぢましたが、又、

「万年筆……小包……出して下さい……ドイツ少年の

名譽……お母さん。」

これが彼の最後の言葉でした。

こゝまで來ると、手紙の文字は怪しく亂れて來た。そし
て最後に、カールの心中を可愛さうと思ふなら、同封した彼
の寫眞に頬摺ホヅリして、あなたの寫眞と一緒に送り返してくれ
と書いてあつた。

『輝く凱旋像』

寫字

二二 自然の推移

相馬御風

文學者

名は昌治

新潟縣の人

明治十六年生

五十六

七十一

七十一

相馬 御風

ゆふべ

良寛

俗名は榮藏、越

後國(新潟縣)の

人、歌僧、天保

二年(西元一八五

年七十四、寂

池、泌

わが待ちし秋は來ぬらしこのゆふべ

草むらごとに蟲の聲する

これは良寛和尚の歌である。一見平凡のやうで、しかもしみぐと胸に沁み入る力を持った歌である。ふと蟲の音に心をとめた刹那の心の動きが、「このゆふべ」の一句でぴたりと捉へられてゐる。今までぼんやりして氣づかずにゐたが、今晚ふと心をとめて聴くと、どこの草叢からも蟲の聲がきこえる。その蟲の音を聴くと、いよ／＼自分の待つ

てゐた秋が來たらしく感ぜられる。——一首の大意はそれほどほどのところであらうが、それだけのさらりとした表現のうち、秋を待ち得た歡びも、更に、自然の推移に對する驚きといったやうな心持さへも感ぜられる。この歌について思ひ出されるのは、かの有名な

秋來ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

といふ古歌である。二首とも音によつて始めて「秋を感じてゐる點で相通じてゐるのは面白い。「秋は蟲の聲より」——かう一人は感じた。そこが一種の興味をそゝる。

秋來ぬと
藤原敏行の歌
(古今集)
風の音にぞ……
ぬる

比べよう

これらの名歌と比べようといふのではないが、私は嘗てこんな歌を詠んだことがある。

わが吹きし煙草の煙の行末を

眺めたりけり

今朝しみぐと眺めたりけり

毎朝起きたての茶の間の爐傍に安座して、心靜かに二本の煙草を燻らす事が、この數日のわたくしの大きな樂しみの一つである。その朝も私はいつもの通りにそれをやつた。ところがどういふはずみであつたか、その朝に限つて私の視線が不思議に窓から見える空へとひきよせられた。なんといふ澄みきつた空の色だ。何といふそれはさやけさだ。そしてそのさやかに澄みきつた大空へと、靜か

はずみ

かほそい

に亂れずに立昇つて行く細い煙の姿。しかもそれは私の口が吸つては吐き、吸つては吐きしてゐる煙ではないか。あくまで靜かに、あくまでもゆるやかに、その紫がかつた白い煙は、深く澄んだ空へと高く高く昇つて行く。そのかほそい、末は消えてしまふべき運命を持つた一條の煙——私の眼は、私の心はいつとなしにしみぐと、その煙の行末にと惹きつけられてゐたのであつた。

その大空の色と、その煙の姿。私はそこに始めてしみじみと「秋を感じた。」「秋は大空より。」「秋は煙の姿より。」「その朝、私は更にそんなことまで感じたのであつた。

しかし、季節の推移は必ずしも何々から感ぜられると限

つてはゐらない。それは時に全く思ひがけないやうな現象や、些細な事柄から感ぜられることがある。それは年々にちがふ。それは人によつてちがふ。いかに細かないかに深い注意を以て観察してゐる人にも、季節の推移の眞に感ぜられるのは、おそらくいつでも「ふとして」であらうと思はれる。

季節の推移は年々歳々同じやうに繰返されてゐるのであるが、しかし、年々歳々にそれはあたらしく感ぜられる。「ああ、もう秋だ。」といったやうなおどろきも、年々に新たである。自然は常に新たである。自分の庭にある木や草でさへも、見る度に新たな氣持がする。人間の造つたものは、

如何に美しくても、いつかは飽きずにもゐられないが、自然の風物は常に新たである。

人間の造つたものでも、自然が與へるやうな、見るたびに接するたびに、新たな感じを與へるものほど貴い。また、何物に對しても自然に對する時のやうに、常に新たな感じを持ち得る人は貴い。それは幼児の心だ。生そのものに對して常に新たな心を持ち得るものは幼児である。「成人の後までも幼児の心を失はないものが眞の詩人だ。」といったエマーソンの言葉も貴い。

エマーソン
(1803-1882)
米國の思想家。

〔野を歩む者〕

二三 ふるさと

石川 啄木

石川啄木
歌人
名は一
岩手縣の人
明治四十五年
歿
年二十七

ふるさとの訛なまことなつかし
停車場の人ごみの中に
それを聴きにゆく

遊びに出て子供かへらず
取り出して
走らせて見る玩具の汽關車

不來方のお城
盛岡城
盛岡市の中央に
城趾あり

空にすはれし十
五の心

うしなひしをさ
なき心ひろへる
ごとし。

不來方のお城の草に寝ころびて

空に吸はれし

十五の心

飴賣のチャルメラ聴けば

うしなひし

をさなき心ひろへるごとし

高きより飛びおりるとき心もて

この一生を

終るすべなきか

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

二四 秋の嫩草山

島村抱月

島村抱月
明治大正の文學者
早稻田大學教授
名は瀧太郎
石見の人
大正七年歿
年四十八

自分は奈良の契點を嫩草山に置いて見る。此の土地で最も氣に入つたものは此の山である。

明るく眼をあい
たやうな嫩草山
が坐つてゐる。

二月堂、三月堂の邊に小半日を過ごして、春日神社の方へ抜けようとする（坂人伏）と、すぐ左手に明るく眼をあいたやうな嫩草山が坐つてゐる。右は春日山、左は手向山、いづれもこん

燃えるやうな紅葉の錦

小春日の暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。

もりとして燃えるやうな紅葉の錦をかけてゐる。其の間に挟まつて、此の山一つが肌を脱いだやうに柔らかである。山といふよりも丘である。かけ上ればすぐ頂に達せられさうに見える。圓みを持った輪廓をのびくと西南にひろげて、其の裾が自分の今通つてゐる道である。曇つてゐた空が、ちやうど此のころから晴れて來て、小春日の暖い日光が一面に此の山に流れかゝつてゐる。中腹に殊さらしく松の大木が三四本立つてゐる外、立木といふものは一本もない。秋草の黄いろに枯れたのが、しなやかな毛織物のやうに全山を蔽うてゐる。その勾配のなだらかな、廣々とした裾野には鹿が遊んでゐる。掛茶屋がある。白い手

拭を姉さまかぶりにして手甲をかけた草の根搔の女がある。時たまに茶屋の女が客を呼ぶ聲の外、物音一つも聞こえない。掛茶屋に腰をおろしてうつとりしてゐると、いつの間にか、うつら／＼と眠くなるやうな気分である。鹿は雌鹿が多い。草の上に腹這つてゐるのは、大抵顔を日の方



嫩

へ向け、まぶしさうに眼を細めて、口をもぐ／＼させてゐる。立つてゐるのは、其の涙ぐんだ大きな黒い柔らかな眼をぢつとさせて、物を考へる道でもなく考へぬでもない様



山 草

子をしてゐる。或は絶えず何物にか驚いてゐるやうにも見える。人が行くと逃げなくても逃げないといふ態度で寄つて来る。一皿二錢の餌を、一つ／＼つまんで口に含ませてやると、しまひにはみんな懐いて来る。前の一疋にやつてゐると、右の奴は外套の袖を喰へて引つばる。後の奴は裾を喰へ

やはり人なつこ
いのは雌鹿であ
る。

穩かな彼等の世
界にも波瀾はあ
る。

て引つぱる。自分等にも呉れといふ催促である。兒鹿は遠慮して離れてゐる。雄鹿も其のいかめしい角の手前すまして後の方にゐる。やはり人なつこいのは雌鹿である。と思つてゐると、あとの方にゐた一疋の雄鹿が自分等の方へ餌の廻つて來ないのを憤つたと見えて、其の角の生際の邊を振り立て、傍にゐた雌鹿の横腹をどんと突いて倒した。今まで靜かであつた一群が忽ち動搖し始める。併し騒ぎはそれだけで、また元の平和に戻つてしまつたが、穩かな彼等の世界にも波瀾はあるのである。茶屋の女が出した木熟しの柿の甘いのを一つ二つ剥いて食ふ。鹿が後へ來てしきりにお辭儀をしてゐる。皮や

へたを投げてやると、みな喰つて了ふ。

山は一面に黄色な芝草を地として、卓出でてゐる草に薄がある草萩がある。薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする輕やかな穂を出して、かすかな風に揺れて見せる。草萩も花はもう無いが、折り取つて見ると小鳥の脚のやうに赤い水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戰つてゐるのが無慙である。

しばらく、草の上に坐つて此の山と親しんで見る。秋の嫩草山を人化したら、二十五六の尼僧が、黄絹の袈裟ころもを着て端坐した心持であらう。

〔中略〕

薄は小柄のやさしいのが、紅の細々とした莖に白光りのする輕やかな穂を出して、かすかな風に揺れて見せる。草萩も小鳥の脚のやうに水々した莖に生氣を充實させて、花の後の秋の荒みと戰つてゐる。

純正國語讀本 卷一終

昭和十二年七月廿五日印
昭和十二年七月三十日發
昭和十三年一月二十日訂正再版印刷
昭和十三年一月廿五日訂正再版發行

純正國語讀本改訂版

各卷定價金六十錢



編纂者

五十嵐 力

發行者

山田 謙吉

印刷者

五十嵐 良晃

◆發行所

東京市牛込區原町二ノ四六

早稻田圖書出版社

振替東京一三六一五三番

◆關西特約販賣所

大阪市東區北久太郎町四ノ一六

會社 柳原書店

一學年九學級

阿保憲

